

平成 27 (2015) 年度

文部科学省生涯学習政策局青少年教育課委託事業

平成 27 年度「青少年国際交流推進事業」

日独青少年指導者セミナー B3 (芸術分野)

**「日本とドイツのダンス(バレエ)教育の  
システム・制度の違い」  
に関する報告書 2015 <派遣事業>**

平成27年12月

公益社団法人 日本バレエ協会

## はじめに

本冊子は文部科学省による「平成27年度“青少年国際交流推進事業”」における「日独青少年指導者セミナー部門」B3「芸術分野」に於いて公益社団法人日本バレエ協会が行った派遣事業に関する報告書である。

文部科学省による本事業は国内外の青少年指導者及び次代の担う青年リーダー、高校生の海外派遣・日本受入を行い、内外の青少年の現状・課題点等についての意見交換や、青少年育成活動、施設等の現地調査を行うなど研修を伴った相互交流事業を実施することを趣旨としており、中でも当協会が企画応募した青少年指導者セミナー部門、B3「芸術分野」は、芸術分野に於ける日独の相互交流や研究協議、意見交換等を通して両国の理解と親善を深め、信頼関係を構築することを旨としている。

本来、本事業に於いては日独双方の同一会計年度に派遣と受入事業を実施することを通例としているが、今回はドイツ側の時間的調整が取れず、日本からの派遣事業のみが実施出来た。

今回の訪独に際しては「日本とドイツのダンス（バレエ）教育のシステム・制度の違い」をテーマに視察、ディスカッションを行ったが、一言で言って予想以上に充実した内容の濃い訪問となった。

所謂学校教育の分野では様々に比較研究が成されている様であるが、こと舞踊に関してはバレエであれ現代舞踊であれ民族舞踊であれ、あるいはリトミック等の分野であれ両国における舞踊教育制度、システムの比較文化論的な言及は従来殆ど見当たらない。本報告書が今後の研究の一助になれば幸いである。

尚、本報告書は第一章、及び第二章の1を事務局小林が、第二章の2以降を訪独団榎野が、第三章1～3を訪独団団長吉田が、訪問先での詳細レポートに関しては各レポート文末記載の訪独団諸角、若佐、成澤、野村、松村が執筆した。

また本報告書掲載写真の撮影は榎野が、本報告書編集は松村が統括して行った。

平成27年12月

公益社団法人日本バレエ協会

## 目 次

( ) 内執筆者

### 第1章 平成 27 年度事業の概要

1. 平成 27 年度における日独交流事業の概要 (小林) . . . . . P. 1～3
2. 関係者名簿 . . . . . P. 4

### 第2章 ドイツへの派遣事業

1. 派遣事業の概要 (小林) . . . . . P. 5～7
2. ドイツでの行程 (檜野) . . . . . P. 8
3. 行動地図 (檜野) . . . . . P. 9
4. スケジュール記録 (檜野) . . . . . P. 10～15
5. ホームステイ記録 (檜野) . . . . . P. 16～18

### 第3章 ドイツ派遣者のレポート

1. 平成 27 年度ドイツ派遣事業に参加して (吉田) . . . . . P. 19～20
2. ドイツ連邦共和国ダンス連盟について (吉田) . . . . . P. 21～22
3. ドイツにおけるダンス教育 (吉田) . . . . . P. 23
4. ドイツで訪問した施設等について (日付順)

- ① 9/1 ローラー・ロゲ・ダンススクール支部 (諸角) . . . . . P. 24～27
- ② 9/1 フォークダンスグループ「渡り鳥」(野村) . . . . . P. 28～31
- ③ 9/2 ハンブルグバレエ学校 (若佐) . . . . . P. 32～37
- ④ 9/3 ハンブルク市内観光&サーカス鑑賞 (成澤) . . . . . P. 38～39
- ⑤ 9/4 ローラー・ロゲ ダンススクール本部 (諸角) . . . . . P. 40～43
- ⑥ 9/5 バーベキュー・パーティー (野村) . . . . . P. 44～45
- ⑦ 9/6 キール：民族衣装祭 (若佐) . . . . . P. 46～49
- ⑧ 9/6 リューベック市内観光 (若佐) . . . . . P. 50～53
- ⑨ 9/8 ベルリン国立バレエ学校 (諸角) . . . . . P. 54～59
- ⑩ 9/8 ベルリン：ジプシーレストラン (野村) . . . . . P. 60～61
- ⑪ 9/9 カソリック教会附属聖ヘドリック小学校 (松村) . . . . . P. 62～65
- ⑫ 9/9 青少年ダンスアンサンブル (成澤) . . . . . P. 66～69
- ⑬ 9/10 ポスダム・ダンス・ファクトリー (若佐) . . . . . P. 70～73
- ⑭ 9/10 フライング・ステップ・アカデミー (成澤) . . . . . P. 74～77
- ⑮ 9/11 トランジション・ダンス・センター (野村) . . . . . P. 78～82
- ⑯ 9/11 ベルリン：コンテンポラリーダンス公演鑑賞 (松村) . . . . . P. 83～84

付録：ドイツ派遣事業参加募集要項、報告会議事録など

P. 85～93

# **第一章 平成 27 年度事業の概要**

## 1. 平成 27 年度における日独交流事業の概要

本事業は文部科学省によって実施された企画コンペ、「平成 27 年度“青少年国際交流推進事業”」における「日独青少年指導者セミナー部門」の B3「芸術分野」に当協会が企画応募し、採択された事により実施の運びとなった事業である。

当協会が提案した交流テーマは「日本とドイツのダンス（バレエ）教育のシステム・制度の違い」であるが、このテーマを選んだ意図はドイツという国の特性にある。

この国はヨーロッパのほぼ中央に位置する事からして当然の事ながらその伝統の一分野として欧州発祥の所謂クラシックバレエを育んできたが、一方に於いてヨーロッパで最も早い時期からモダンバレエ（ダンス）、コンテンポラリーダンス、創作舞踊等、現在の呼び方は様々であるが広義での舞踊の革新、と言うか舞踊の持つ様々な可能性に着目した国である。

舞踊史に於いて 20 世紀初頭に始まるノイエ・タンツ（新しい舞踊）と総称される同国に於けるこの舞踊革新のムーヴメントは、所謂ドイツ表現主義運動の中での舞踊、鑑賞を目的とする舞台芸術創作の範疇に留まらず「身体表現」としての切り口から、例えば思想背景は異なるものの R. シュタイナーによるオイリュトミーの様な新感覚の表現様式から児童青少年の感性・情操教育に於ける方法論的応用、生理整体学的応用、更には J. P. サルトルの言うアンガージュマン的な舞踊の社会参画等へと多方面に派生する稀有な展開を先駆的に見せている。

片や我が国は極東の地に在りながら欧州生まれの、他者の伝統であるクラシックバレエを移入して 100 年程の短期間に、体躯的なハンデキャップを克服して欧米一流バレエ団にダンサーを多数送り出すまでに急成長した国である。然るに我が国がバレエを自家薬籠中の技に成し得た過程にあつて、先達欧州からの指導は決して手取り足取りのものではなく、その多くの部分に於いて我が国独自の何等かがこの急成長を促しており、その何等かが何たるか、教育制度なのか、民族的メンタリティーなのか、或いは社会構造なのかを、漠然とはイメージできるもののそれをより鮮明に明らかにする手段として舞踊を拡大的に諸分野に応用しようと試みたドイツとの比較は最適であると考え、本交流のテーマを表記のものとした。

主要都市には概ね公立の劇場が設置され、音楽やオペラと並んでバレエやコンテンポラリーダンスが劇場付属のバレエ団、或いは民間のカンパニーによって上演されて多くの国民の楽しみとして供され人気を博している欧米（ドイツ）と、ある意味、社会的ニーズ以上のカンパニーの乱立によって只でさえ決して多いとは言えない舞踊愛好家のパイを分散させて公演の経済的自立を達成し得ないでいる我が国の、すなわち受け手側の土壌の違いに日欧の舞踊文化に於ける相違の原因の殆どを見出す事は従来からの常套であるが、公演団体同士の交流なら兎も角、それは今回の指導者サイドによる文化交流とは次元の異なる議論であり、今回の訪独にあつては敢えて「新たな観客層の開拓についての工夫や努力」

といった観測点は割愛した。

本事業の企画コンペ締切は平成 27 年 2 月下旬であったが、企画採用の内諾を 4 月初旬に受け（正式文書通知受領は 4 月 24 日）、ドイツ側ホストとなるドイツ連邦ダンス連盟（(Deutscher Bundesverband Tanz : DBT) と日程等の調整を開始すると同時に訪独団を構成する為に団員の公募準備作業に着手した。

以下に事業の流れを時系列で概説するが、具体的な派遣事業内容については後段のレポートを参照願いたい。

また予め特記するが、本来、本交流事業は日独双方の派遣と受け入れ事業がペアとして設定されているが、今般、ドイツ連邦ダンス連盟サイドで我が国平成 27 年会計年度中での訪日日程調整がどうしても付かず、今年度は当協会による派遣事業のみが実施出来た。

#### ■ ドイツ派遣事業参加者募集要項の検討（平成 27 年 5 月 11 日）

企画案の採択を受け、事業実行委員会において訪独団募集要項の内容、募集開始時期等が検討された。同時にドイツ連邦ダンス連盟と派遣・受け入れ時期の調整に入った。

尚、本事業実行委員会は文部科学省による本事業企画公募に応募を決定した平成 26 年 10 月の段階で当協会常務理事会を母体に組織された。

#### ■ 派遣時期の決定と受け入れ事業の中止

5 月、6 月中を通じてドイツ連邦ダンス連盟とメールでのやり取りを重ねた結果、訪独団の受け入れ時期についてはこちらの希望がほぼ了承されて本年 9 月 1 日からの約 2 週間に決定したが、受け入れ時期については前述の様にこちらの提案した平成 28 年度 2 月案にどうしても日程的な都合が付かず、再提案した平成 27 年 11 月案も受け入れられ得ず、文部科学省と協議の結果、平成 27 年会計年度中は、訪独、すなわち派遣事業のみを実施する事となった。

ちなみに実現しなかったが、当協会の作成した平成 28 年 2 月案は、大阪芸術大学舞台芸術学科舞踊コース、大阪山村座、新国立劇場舞踊研修所、歌舞伎座等の見学に加え、当協会や現代舞踊協会、ダンスを学校教育に取り入れた文部科学省等とのディスカッション、京都、東京観光等も交えたプログラムであった。

また派遣に関しては、現代バレエの最先端的活動を続けるジョン・ノイマイヤーのハンブルグ・バレエ学校、及びドイツで最も伝統あるクラシックバレエの名門、ベルリン国立バレエ学校の見学を希望し、その両方が適えられた。

#### ■ ドイツ派遣事業参加者募集要項の決定（平成 27 年 6 月 25 日）

事業実行委員会において訪独団募集要項（本冊子巻末参照）が決定され、7 月初旬を目処に当協会会員約 2,300 名にダイレクト・メールとして発送、並行して当協会インターネット・ホームページに掲出して一般公募とする事も併せて決議された。

■ ドイツ派遣事業参加者の公募開始

7月5日に前記ダイレクト・メールを送付、同時にホームページにも掲出が開始された。

■ 派遣メンバーの決定（平成27年8月4日）

応募締切が7月31日に設定されていたことを受け、同日迄に書類提出があった16名を事業実行委員会にて検討の結果、別紙の7名を選出、決定の案内と同時に参加意志の最終確認を書面にて本人に送付した。また訪独団の団長としてドイツでの活動実績のある吉田まり女史を選出した。メンバー選定に当たってはとりわけ応募書類記載の志望動機、また研修結果を還元できる立場にあるかを重視した。

■ 事前研修会の内容決定（平成27年8月18日）

当協会の夏季催事が続く時期であるため、事前研修会の実施が出発前日にしか設定できなかったが、事前研修会を今回の訪独団の団長として専任した吉田まり女史にドイツに関する基本的な情報、また注意事項等をレクチャーして頂き、事務局小林よりドイツ連邦ダンス連盟から送られてきているスケジュールに関しての詳細説明が行われることが打ち合わされた。

■ 事前研修会の実施（平成27年8月30日）

前項に挙げた内容で事前研修会を事業実行委員、訪独団メンバー出席の上（野村一樹氏のみ都合により欠席）、当協会品川区五反田の事務所にて開催した。また現地に於けるメンバーの役割分担を決めた。

■ ドイツへの派遣

訪独団メンバーは8月31日に成田空港をトルコ航空機で出発、フランクフルト、ベルリンにて約2週間の交流を実施、9月13日に成田空港に帰着した。滞在中の全てのプログラムはドイツ連邦ダンス連盟の手により極めて綿密に練り上げられていた。

■ 報告会の実施（平成27年10月29日）

事業実行委員会に対する訪独団メンバー全員による派遣事業報告会が当協会品川区五反田の事務所にて開催された。

## 2. 関係者名簿

- 派遣事業参加者・訪独団 ( ) 内本名
  - 吉田 まり (真理) トゥラウム・バレエ教室主宰 日本バレエ協会会員 【団長】
  - 松村とも子 (近藤朋子) パティオダンススクール主宰 日本バレエ協会会員
  - 成澤千佳子 若尾バレエ学園学園長 日本バレエ協会会員
  - 諸角佳津美 (西川佳津美) (公財)井上バレエ団理事・教師
  - 若佐久美子 若佐久美子バレエスクール主宰 日本バレエ協会山陰支部長
  - 檉野 隆幸 飛鳥桜子バレエスクール主宰 日本バレエ協会会員
  - 野村 一樹 のむらバレエ代表 日本バレエ協会業務執行理事
  
- 受入事業担当者
- Dr.Ulla Ellerman (Frau) ドイツ連邦ダンス連盟会長
- Dieter Knodel (Herr) ドイツ連邦ダンス連盟副会長 【日本との連絡担当】
- Dr.Heike Patzschke (Frau) 通訳 ケルン大学非常勤講師、ドイツ外務省専属通訳
  
  
- 事業実行委員会 (設置場所：公益社団法人日本バレエ協会内)
  - 岡本佳津子 日本バレエ協会代表理事・会長 【委員長】
  - 小林 紀子 日本バレエ協会代表理事・副会長
  - 高木 俊徳 日本バレエ協会業務執行理事・専務
  - 漆原 宏樹 日本バレエ協会業務執行理事
  - 篠原 聖一 //
  - 金田 和洋 //
  - 早川恵美子 //
  - 小林 秀穂 日本バレエ協会事務局主任 【ドイツとの連絡担当】

## 第二章 ドイツへの派遣事業

## 1. 派遣事業の概要

ドイツへの派遣事業は、派遣団の公募並びに人選を日本バレエ協会が、ドイツ滞在中のプログラム企画並びに実施はドイツ連邦ダンス連盟がそれぞれ担当した。

派遣に至るまでの経緯は前章を、プログラムの詳細内容については後章レポートを参照願ひ、ここでは派遣事業内容の概要を記す。

### ■ 派遣実施期間：

平成 27 年 8 月 31 日（日）成田発、同日ハンブルグ着。

現地時間 8 月 12 日ベルリン発、平成 27 年 8 月 13 日（日）成田着。

ドイツ滞在は 12 泊 13 日間である。

### ■ 受入担当団体について：

受入団体のドイツ連邦ダンス連盟（(Deutscher Bundesverband Tanz : DBT) は 1953 年、当初はドイツ各地に伝わる民族舞踊（フォークダンス）の継承と振興を図る団体として発足し、その後、広くドイツに於けるダンス文化の振興を図る組織として各種舞踊団体や専門家集団を取り込み、ダンスのための全国統括組織へと発展してきた非営利団体である。

同協会の所謂定款のよると同連盟の目的は文化的、教育的、社会的更には政治的レベル等、様々な場面に於いて舞踊文化の重要性をアピールすると同時にそれら場面に於いての舞踊文化の貢献度を増すことにありと謳われており、フォークダンスやバレエやモダンダンス、ジャズダンス、ヒップホップやコンテンポラリーダンスといった様々な舞踊の教授、研究、普及を図る会議、公演の実施及び関連出版物の刊行を連邦省の助成を受けてボランティアで行っている。

組織形態としては傘下に様々な舞踊ジャンルの統括団体、研究機関、専門家団体、大学、専門学校等を組み入れて活動しており、その点、バレエに特化した活動を行っている当協会より幅広い活動領野を持つ団体であり、同時に社会的影響力も強い組織だと考えられる。またドイツは 16 ある州のそれぞれが自治権をもって独自の文化施策を行っている状況があるが、DBT は各州に連携ネットワークを構築してドイツ全土の文化教育にダンスの分野から様々な貢献を行っている。

尚、特筆すべきは活動の対象・ターゲットが所謂プロフェッショナルのダンサーに力点が置かれているのではなくアマチュア、一般人であり、訳語として適切であるか否かは別にして「草の根ダンス運動」という表現が当を得ているかもしれない。従って例えばダンス指導者の派遣先、ダンス・イベントの開催場所といった事業の場も、子供や青少年、一般社会人、専業主婦、高齢者等のサークル、学校、諸施設等が中心であり、そのスタンスの点ではプロフェッショナルを志す人材の育成・支援に活動の主点を置く当協会とはニュアンスを異にする。

■ 受入側担当者について：

P.4 「受入事業担当者」の項参照。

■ 日本からの派遣者について：

P.4 「派遣事業参加者・訪独団」の項参照。

■ 事前研修会の実施（平成27年8月30日）

事業実行委員、訪独団メンバー出席の上（野村一樹氏のみ都合により欠席）、当協会東京都品川区五反田7-17-5宮下ビル3階の事務所にて事前研修会が開催された。

ドイツでの活動経験のある訪独団団長の吉田まり女史にドイツに関する基本的な情報、バレエ（ダンス）事情、また通常行動に於ける注意事項等をレクチャーして頂き、事務局小林よりドイツ連邦ダンス連盟から送られてきているスケジュールに沿って訪問先情報を添付した資料が配布され、事前情報の共有が行われた。インターネットの普及により我が国に居ながらにしてほぼ全ての訪問先詳細情報が事前に入手できたのは幸いであった。



## 事前研修会内容

日時：平成 27 年 8 月 30 日（日） 午後 1 時～午後 3 時

会場：公益社団法人日本バレエ協会会議室（東京都品川区五反田 7-17-5 宮下ビル 3 階）

	実施内容
13 : 00	開会の挨拶 公益社団法人日本バレエ協会副会長 小林紀子
13 : 10	派遣者の自己紹介
13 : 15	ドイツのダンス事情、お国柄、日常生活について トゥラウム・バレエ教室主宰、平成 27 年度ドイツ派遣事業派遣団団長 吉田まり
13 : 40	質疑応答
14 : 15	ドイツ連邦ダンス連盟。及び受入担当者の紹介 訪問先に関する個別概略説明、及び旅行保険についての説明 公益社団法人日本バレエ協会事務局 小林秀穂
14 : 30	派遣団間の打ち合わせ ※ 滞独中のメンバーの役割分担について ※ 訪独レポート作成について
14 : 55	閉会の挨拶 公益社団法人日本バレエ協会副会長 小林紀子

## 2. ドイツでの概略行程

	月/日	宿泊地(訪問先)	研修内容等
1	8/31(月)	ハンブルグ	成田発(トルコ航空51便)、イスタンブールで乗り継ぎ(TK116) ハンブルグ着(21.25p.m.) アルトナにある宿泊施設(Motel One)チェックイン
2	9/1(火)	ハンブルグ	ホテルのロビー集合(ミーティング) グリム童話の博物館 Lola Rogge Schoolへ
3	9/2(水)	ハンブルグ	John Neumeier(ジョン・ノイマイヤー)バレエスクール フォークダンス「渡り鳥」見学
4	9/3(木)	ハンブルグ	アイス・タバサ、市庁舎を観光 自由行動 サーカス鑑賞
	9/4(金)	ハンブルグ	Lora Rogge School 後、夕食へ
	9/5(土)	ハンブルグ	ホテルをチェックアウト後、連盟副会長ディータ氏宅へ移動 ディスカッション バーベキュー・パーティー 後、ホスト・ファミリー宅へ
	9/6(日)	キール リュベック	第10回 Laboer 民族衣裳祭 ホスト・ファミリー宅へ
	9/7(月)	ベルリン	ベルリンへ移動 ダンスアンサンブルの代表と教師の方と会食
	9/8(火)	ベルリン	ベルリン国立バレエ学校
	9/9(水)	ペーターハーゲン ノイハーゲン	カトリック系小学校訪問(Petershagen) Neuenhagen bei Berlinの市役所訪問 ダンスアンサンブルのスクールを訪問
	9/10(木)	ポツダム ベルリン	ポツダム到着後、市内観光 Hans Otto 劇場を訪問 フライング・ステップアカデミー訪問
	9/11(金)	ベルリン	Transition Zentrum Deutschland 訪問 ディスカッション コンテンポラリー・ダンス鑑賞
	9/12(土)	ベルリン	ホテルにてフィードバック ベルリン空港へ(トルコ航空1726便)イスタンブール乗り継ぎ
	9/13(日)		トルコ航空 TK52 便にて成田着(18:30p.m.) 到着後、空港にて解散

### 3. 行動地図



## 4. スケジュール詳細

### 8月31日(月) 東京/ハンブルグ(天候:雨)

#### ※日本時間

08:15 am. 集合(成田空港第1ターミナル出発ロビー)、チェックイン

10:05 am. 成田空港発(トルコ航空TK51) ※実際の離陸は11:10 am

#### ※ドイツ時間

16:45 pm イスタンブール空港着 ※トランジット

19:10 pm イスタンブール空港発(TK1667)

21:25 pm ハンブルグ着 ※実際の着陸は22:25 pm

入国審査終了後、ダンス連盟会長のエレマン氏、副会長のディーダ氏、通訳のパチケ氏と会う。

アルトナにある宿泊施設(Motel one)へチェックイン。翌日の予定を聞いて、終了。

宿泊先:(Motel one) Kleler StraBe 171 22525 Hamburg

Tel:+49/40/8 97 20 69-0 Fax:+49/40/8 97 20 69-10

Hamburg-altona@motel-one-.com

### 9月1日(火) アルトナ(曇り)

09:10 am. ホテルロビー集合 ミーティング

※交通機関バス及び電車の(1週間乗り放題)チケット・地図を受け取る。

09:50 am. ホテル前のバス停から183番のバスに乗り altona の駅に移動し徒歩で Lola Rogge school へ。

11:50 am. Lola Rogge school (場所:元別荘 200年以上前の建物)へ移動し、meeting (自己紹介)。Lola Rogge School 校長のクリスチャン・メイヤー・ロゲ・ターナー校長から学校の歴史や指導法、独自のメソッドの説明を受ける。

13:30pm. 昼食

15:00pm. Lola Rogge school 校長から学校の歴史や指導法、独自のメソッドの説明を受ける。

9歳・10歳のクラスを見学。運動コースについて説明があった。

18:30pm 夕食

20:30pm. グループの指導者でもあるディーダ氏から、「渡り鳥」フォークダンスグループの紹介があった。ディーダ氏による幾つかのステップの指導が、グループのメンバーに対して行われた後、「ポルカ」他のダンスをグループのメンバーと一緒に踊る。

22:00pm ホテル

9月2日(水) アルトナ(晴れ)

- 08:45am. ホテルロビー集合。当日の打ち合わせ。
- 09:30am. ホテル前のバス停よりバスに乗車。地下鉄に乗り継いで Hasselbrook 駅から徒歩でジョン・ノイマイヤーのスクールへ。
- 11:00am. 17歳・18歳のクラス、男子クラス、コンテンポラリーダンスクラスの見学。後、カフェテリアで昼食。  
教師 (Indrani Delmaine 氏) から学校について説明があった。  
13・14歳の女子のクラス、6・7歳の女子のクラス、小さな男子クラスを見学。  
徒歩で駅に向かい夕食へ。

9月3日(木) アルトナ(晴れ)

- 10:00am. ホテルロビー集合。 昼食代を支給される。 後、バスに乗り移動。地下鉄に乗り継ぎ、アイスタバサへ。
- 11:00am. アイスタバサを散策した後、教会、市庁舎を見学。
- 12:15pm. 解散して自由行動。(各自、昼食を採る)。
- 14:30pm. クルージング(観光)
- 16:30pm. 船上で夕食。
- 19:00pm. サーカス鑑賞。 終了後、ホテルへ。

9月4日(金) アルトナ(晴れ)

- 09:30am. ホテルロビー集合。
- 09:50am. バスで altona の駅に移動。電車に乗り継ぎ Lola Rogge school へ。
- 11:00am. インプロの授業を見学。派遣メンバーも参加。生徒たちとディスカッション。モダンダンスクラスを見学。派遣メンバーも参加。  
後、生徒たちとディスカッション。モダン教師はカーチャ・ボルシュドルフ氏。  
フォークダンスのクラスを見学。派遣メンバーも参加。生徒たちとディスカッション。  
スクール内で昼食。  
Lola Rogge school についてディスカッションを行う。  
連盟が行っているダンス教師を育てるプログラムについて説明を受ける。
- 18:00pm. 夕食。
- 20:30pm. 高層ビルの最上階のラウンジへ。

9月5日(土) アルトナ(雨)

- 09:45am. ホテルロビー集合。 ホテルをチェックアウト。
- 10:40am. ホテル前のバス停からバスに乗り最寄りの駅から電車に乗る。

- 11:35am. ディータ氏がレンタカーで駅までお迎え。昼食を買って、ディータ宅へ。
- 11:55am. 昼食後、ディスカッション開始。Lola Rogge school について説明。
- 15:30pm. 一旦、ホストファミリー宅へ。
- 17:00pm. 再び、全員ディータ宅に集合。
- 17:30pm. ホストファミリーを交えてバーベキューパーティー。
- 11:00pm. 解散。各ホストファミリー宅へ。

#### 9月6日(日) アルトナ(晴れ)

- 09:30am. ディータ宅に集合。
- 10:00am. ディータ氏が運転をするレンタカーで、ドイツの一番北にある州のキー  
に向かう。第10回 Laboer 民族衣裳祭を見学。  
全員で、現地を散策した後、解散し各自で民族舞踊を見学。
- 15:00pm. ルーベックへ移動。
- 17:30pm. 夕食。後、ハンブルグに向かう。
- 22:30pm. ディータ宅に到着。各自、ホストファミリー宅へ。

#### 9月7日(月) アルトナ(晴れ)

- 10:00am. ディータ宅に集合。
- 10:30am. タクシーに分乗してセントラル駅に向かう。
- 12:06pm. セントラル駅を出発しベルリンへ向かう。
- 13:45pm. ベルリンに到着。乗り継ぎをして Neuenhagen に向かう。
- 15:45pm. アンサンブルのマイシュ氏と娘さんが駅に出迎え。ホテルへ向かう。
- 17:00pm. ホテル食堂の隣の部屋でミーティング。
- 19:15pm. ロビーに集合。
- 19:45pm. スクール代表と、マイシュ氏を囲んで会食。会食後、ホテルへ。

#### 9月8日(火) Hoppegarten〈ホップガーデン〉(晴れ)

- 07:45am. ホテルロビー集合。
- 08:00am. 駅に到着。
- 08:48am. ガースワイダー駅 (Greifswalder StreBe) 到着
- 09:00am. ベルリン国立バレエ学校に到着。
- 09:30am. バレエ学校のオラフ・ヘーファー先生と打ち合わせ。
- 09:40am. バレエ学校の中を説明を受けながら視察。
- 10:00am. 2つのボーイズクラスと女の子のクラスを見学。
- 10:49am. 女子のクラスを見学。後、生徒たちとディスカッション。
- 11:30am. 食堂で昼食。
- 12:00pm. マレック・ロジスキー先生から説明を受ける。

- 12:15pm. 大きい女子のクラス、大きい男子のクラスを見学。
- 13:10pm. 大きい男子・女子とクラス終了後にディスカッション。《約 30 分》
- 13:50pm. 食堂に戻り教師の方を交えて学校の説明を受ける。
- 14:30pm. 女の子の即興のクラス、大きい女子のモダンクラスを見学。
- 16:15pm. パ・ド・ドゥクラスの見学。
- 17:10pm. 校長先生にご挨拶をして学校を出る。
- 17:50pm. 夕食。(アルゼンチンタンゴのレストランで、タンゴのレッスンを受ける)
- 22:15pm. 電車に乗ってホテルへ。

9月9日(水) ベルリン(晴れ)

- 07:40am. ホテルロビー集合。
- 07:45am. 送迎車で教会へ。
- 08:10am. 教会に到着。校長先生にごあいさつ。始業式。
- 09:11am. 隣の学校に移動。カトリック系小学校 (Petershaben)
- 09:30am. 校長先生から学校の説明を受ける。
- 10:10am. 体育館へ移動し生徒たちとディスカッション。
- 10:40am. マイシェ氏のリトミッククラスを2つ見学。派遣メンバーも参加する。
- 11:50am. 学校の先生たちと職員室でディスカッション。
- 12:12pm. 生徒たちによる学内の案内。生徒の吹奏楽の授業を見学。
- 12:45pm. 校庭に出て生徒たちの様子を見学。
- 12:50pm. 学校の視察を終了。市役所に向かう。
- 13:10pm. Galerie unterm Wasserturm Parkettsaal. 市役所に到着。市長のお出迎え。
- 13:15pm. 市長から市について説明を受ける。市役所内を見学。
- 14:00pm. 市役所の視察を終了。
- 14:15pm. スタジオの近くの市民ホールの中のレストランで昼食。後に徒歩でスタジオへ。
- 15:26pm. Jugendtanz-Ensemble Neuenhagen(若いダンサーによるアンサンブル) スタジオに到着。スタジオの紹介とスタジオ内を見学。
- 15:50pm. マイシェ氏の幼児クラスを見学。終了後、幼児教育の説明。
- 16:25pm. 上の女の子たちとディスカッションとバレエクラス見学。
- 17:08pm. 一番上のクラスの生徒たちとディスカッション後、バレエとコンテンポラリーダンスクラスを見学。
- 17:50pm. 生徒たちが衣裳をつけて踊りを披露。その後、スタジオについて話を聞く。
- 20:00pm. 夕食。
- 22:30pm. ホテルへ。

9月10日(木) ベルリン(晴れ)

- 07:45am. ホテルロビー集合。
- 07:50am. 車で Westend 駅へ向かう。
- 08:48am. 電車に乗ってポツダムに向かう。
- 09:16am. ポツダムに到着。
- 09:45am. ガイド付き観光バスで市内観光。(サンスーツ宮殿を案内してもらう)
- 13:00pm. 徒歩で Tanzfabrik Potsdam 近くで昼食をとる。
- 14:00pm. Tanzfabrik Potsdam (ポツダム・ダンスファクトリー) のディレクター Frau Schwallis 氏にお話を聞く。スタジオ内を見学。
- 15:42pm. 路面電車に乗り Jannowitzbrücke で乗り換えて Kreuzberg のフライングステップスへ。
- 17:00pm. フライングステップス到着。クラスを見学の後、話を聞く。
- 20:00pm. Parkers Bowles にて夕食。
- 21:20pm. Moritzplatz から Jannowitzbrücke 地下鉄。
- 21:29pm. Jannowitzbrücke で乗り換え。
- 22:10pm. Hoppegarten 駅に到着。 車でホテルへ。

9月11日(金) ベルリン(晴れ)

- 07:50am. ホテルロビー集合。
- 08:00am. ホテル出発。車で Neuenhagen 駅へ
- 08:58am. Neuenhagen から Alexanderplatz へ
- 09:00am. 乗り換える。
- 09:06am. ベルリン・プレウツラウアー・ベルグへ (Senefelderplatz 駅)
- 09:30am. 徒歩で(STIFTUNG TANZ) Transition Zentrum Deutschland へ
- 12:15pm. 出発。
- 13:00pm. ハッケシャー広場の中のレストランで昼食。(ディータ氏合流)
- 14:30pm. 同レストランにてディスカッション。
- 15:30pm. 自由行動。
- 17:00pm. レストラン前に集合し路面電車に乗り移動。(ベルリン発祥の場所を通る) 夜食をとる。
- 20:00pm. レストラン前よりタクシーで (Gesund brunnen) へ
- 20:45pm. コンテンポラリーダンスを観賞。
- 21:30pm. 終演。
- 21:53pm. Pankstrasse を出発。
- 23:10pm. Neuenhagen 到着。 車でホテルへ。

9月12日(土) 最終日 ベルリン(晴れ)

- 08:30am. ホテル食堂の隣、ミーティングルームに集合。

09:00am. ミーティング（フィードバック）  
10:30am. 最終ミーティング終了。各自、部屋に戻って帰りの準備。  
11:30am. ホテルを出発。 タクシーに分乗してベルリン空港へ移動。  
空港に到着後、エレマン氏、クノーデル氏、パチケ氏とお別れ。  
13:30pm. チェックイン  
14:50pm. ベルリン空港発（トルコ航空）TK1726 便 ※1 時間半遅れで離陸。  
イスタンブール空港で乗り継ぎ（待ち時間：約 6 時間）  
01:15am イスタンブール空港発（トルコ航空）TK52 便  
18:30pm 東京成田国際空港着  
(日本時間)

## 5. ホームステイの記録

ハンブルグ滞在中の9月5日と6日は、ドイツ連邦ダンス連盟が用意してくれた5つのファミリーで派遣団のホームステイが行われた。

宿泊者	ステイ先家族	職業等
松村とも子 若佐久美子	ご主人：Heino Meyer（51歳） 奥 様：Kerstin Jockel（54歳） 息 子：Yonnix（24歳） 娘      ：Jasmin（21歳） v	財務責任者 小学校教師 大学生 大学生  奥様の“Jockel”という名は珍しく、ご主人の“Meyer”という名前は沢山あるので“Jockel”という名を残すため夫婦別姓にしている。息子さんとの三人が私たちを迎えてくれる。娘さんは学校の近くに独りで住んでいる。
諸角佳津美	ご主人   ： Uwe Borchert 奥  様   ：   Joanne（50歳） 息  子   ： Kristian（5歳）	科学者 音楽教師（休職中） 幼稚園児    奥様は英国人で、子育て中は家庭にいることに決めて、仕事は休んでいる。

宿泊者	ステイ先家族	職業等
吉田 まり	ご主人 : Michael Beier 奥 様 : Mel (Meli Ha) Mohring	
		
<p>二人は夫婦ではなく、奥さんのご主人は若くして亡くなったそうです。</p>		
野村 一樹	ご主人 : Dieter Knodel (56歳) Dance Teacher 奥 様 : Susahhe (52歳) non-medical practitioner 息 子 : David (31歳) Computer engineer 娘 : Anna (26歳) Graphic Designer 息 子 : Jonathan (23歳) Company employee	
		
<p>現在、息子さん、娘さんはそれぞれ自立して個別に生活されている。            今回、息子さん（ディビット）が使われていた部屋をお借りした。</p>		
宿泊者	ステイ先家族	職業等

<p>成澤千香子</p> <p>ハイケ・パチケ (通訳)</p>	<p>ご主人 : Dr.Martin Kollwe (53 歳)      研究者 Dipl-Physiker        奥 様 : Marlies Konig (54 歳)            不動産会社勤務</p>  <p>二人は 10 年くらい前にフォークダンスで知り合い、9 年前に Marlies さんのご主人が亡くなった後、数年して同居。        Martin さんの子→女の子 (22 歳)        Marlies さんの子→女の子 (32 歳)    男の子 (29 歳)    女の子 (26 歳)        現在 4 名共、家を離れて暮らしている。</p>
<p>樫野 隆幸</p>	<p>婚約者(男性) : Florian Meier (27 歳)    コンピューター関係        婚約者(女性) : Ike                            10-18 歳までの学校教師</p>  <p>3 週間前 (8/22) に婚約。2016 年春に結婚予定。</p>

## 第三章 ドイツ派遣者のレポート

## 1. 平成 27 年度ドイツ派遣事業に参加して

公益社団法人日本バレエ協会によって実施された平成 27 年度「青少年国際交流推進事業」日独指導者セミナー「バレエ（ダンス）分野における交流」におけるドイツ派遣事業に参加して、平成 27 年 8 月 31 日から 9 月 12 日までの 13 日間に渡って、ドイツ連邦共和国の北部ハンブルグ周辺とベルリンのバレエ学校やダンスに関する施設など十数か所を視察する機会を得ることができた。この派遣事業への参加者は、公益社団法人日本バレエ協会の審査によって選出された 7 名で、東京都、佐賀県、島根県、三重県、山梨県の各地で、バレエ教室あるいはバレエ団体の運営、指導、振付などを行なっている教師である。

このたびの派遣事業の研修テーマは「日本とドイツのダンス（バレエ）。教育システム・制度の違い」であったが、メンバーは、出発前にいろいろな思いを持って今回の研修に参加していた。以下に、その一部を記す。

- ・ 今回の研修では、ドイツの青少年指導者と共にお互いの国の現状を話し合い、理解した上で互いの利点をダンス教育に取り入れられたらと思っている。特に日本では、東日本大震災の後、日本人の生活観や生活様式の見直しの兆しが見られ、青少年育成について、「豊かな心の育成」や「努力の過程を評価する」ことの意義が大いに謳われているが、ドイツでのダンス教育においてそのような心の教育についても、ディスカッションできたらと思っている。  
ダンスは世界共通の言語である。言語は分からなくても、思いを動作で表現できる。セッションが出来たら最高である。若い才能をいかに大きく花開かせるかは、青少年の育成者の手腕や能力にかかっている。本研修を通して、日本にない指導の目標、考え方や指導法を学び、広い目で日本の青少年指導の育成に貢献できたら幸いである。
- ・ ドイツの教育機関では、どんなシラバスのもとにバレエ教育が行われているのか、教師になるのはどういう人たちなのか、教師としてどのような勉強をしているのか。子どもたちの心身の状態をどうチェックしているか。親との関係はどんな風に調整しているのか。  
上記のような内容を話し合ったうえで、そこで見た教育のシステム、制度の違いをよく分析し、日本の教育の良い点をより向上させ、ドイツに学んだ点を日本システムの中に取り入れることが可能なのか、あるいはある要素だけなら取り込んでいくことができるのか、等について時間をかけて考えていきたいと思う。
- ・ 今や、日本人の多くが留学やダンサーとして活躍しているドイツにおいて、クラシックバレエやコンテンポラリーダンス、またそれを含む身体表現の教授法。地方におけるダンサー育成に係わるノウハウ。社会への発信の仕方。公私のバレエ団の経済的な面。すべてにおける日本とドイツの違いなど、出来るだけ多く学びたいと思う。
- ・ 今回のセミナーに参加し何を期待するかというと、まずは国公立のバレエ学校と私設バレエ

スタジオとの違い、その私設バレエスタジオの役割、またはそれぞれの生徒の経験や年齢によってどのようなカリキュラムが組まれているか、環境（床、音響など）はどのように配慮、工夫をされているかを知ることによって国立バレエ学校の無い日本の私達に求められていることが見えてくるのではないかとということである。

また、日本人に良く似て勤勉という国民性のドイツはフランス、ロシアで発達したバレエをどのようにして独自に発展させたのかということにも興味を持つ。例えばコンテンポラリーダンスのように斬新な作品がたくさん生まれる背景は何か、生徒のレッスンに対する目的意識は年齢や経験などでどのような違いがあるか、それは日本の生徒と比べてどうかというものである。もうひとつ音楽の本場であるドイツならではの、バレエ教育の中に占める音楽教育についても興味を持っている。

この度の視察を通して、メンバーがドイツで体験したことはあまりに多かった。また、渡された資料が全てドイツ語だったため、資料を理解することに時間がかかってしまい十分に消化できて無いように思えた。視察した各所については、分担したメンバーが記した報告のレポートをご覧いただきたいが、研修全体を振り返っての私見としては、今回の目的はダンスに係わる施設（学校など）を視察することと、ダンス教師を育てる施設を視察することであった。

その結果として、日本とドイツのダンス（バレエ）教育のシステムはかなり違っていると感じた。日本ではダンス（バレエ）学校は個人経営がほとんどであるが、ドイツではプロダンサーを育てる学校は国から資金が出され生徒たちはとても恵まれた施設の中で教育を受けている。ドイツではダンス教師を育てる施設も充実していて、日本にはこのような施設は無い。また、ドイツではダンスの教師になる為には、多くのことを学んで教師の資格を得ることはとても大変であると思えた。

正直なところ、ドイツのダンスにおける組織の構造がとても複雑で、ドイツのダンス教育システムのすべては理解できていない。今回の視察だけで、すべてを理解することは困難であった。次回の視察においては、できるかぎり事前にドイツの教育制度やダンス教育についての資料を調べておく必要があると思う。

最後に、多くの施設を視察する準備と同行をして下さったドイツ連邦ダンス連盟 Deutscher Bundesverband Tanz e.V (DBT) の会長のウラ・エレマン氏 (Dr. Ulla Ellermann) 氏、副会長のディーター・クノーデル (Dieter Knodel) 氏、そして、通訳のハイケ・パチケ (Dr. Heike Patzschke) 氏に、感謝とお礼の気持ちを申しあげたい。

## 2. ドイツ連邦共和国ダンス連盟について



公益社団法人日本バレエ協会によって実施された平成 27 年度「青少年国際交流推進事業」日独指導者セミナー「バレエ（ダンス）分野における交流」において、ドイツ側のカウンターパートを務めたのがドイツ連邦ダンス連盟である。今回の派遣事業のために視察等のプログラムを準備し、全ての行程にわたって様々な配慮をいただいた。

ドイツ滞在中に会長であるウラ・エレマン氏からドイツ連邦ダンス連盟の組織の歴史や活動内容などについて説明いただいた。以下はその内容である。

### ①歴史と構成

ドイツ連邦ダンス連盟は、アマチュアを教えるダンス教師が関係する団体の連盟であり、1954 年に設立された。ドイツの 13 の州にわたり、52 の連盟、組織、大学により構成されており、平成 27 年（2015 年）現在は約 190 人のメンバーによって活動している。連盟には、約 2000 名が所属している。

会長である ウラ・エマン氏は 1970 年に連盟に入会し、2011 年に会長に就任した。

会長 ウラ・エレマン  
Dr. Ulla Ellemann



副会長 マーギ・ケイクット  
Margit Keikutt



副会長 ディーター・クノーデル  
Dieter Knodel



## ②連盟の活動

所属する団体のダンスの種類としては、クラシックバレエ、民族舞踊、モダンダンス、ジャズダンス、ヒップホップなどが含まれており、毎年総会が行われ、隔年で専門会議とダンス試問会が開かれている。

2004年から連邦と州でコンクールを開催して、出版物も多く出しているとのこと。

1955年ごろより、年に600から900回のセミナーや研究会を開催している。

- セミナー内容は
- ・子供のためのダンス
  - ・青少年のためのダンス
  - ・成人（大人）のためにダンス
  - ・高齢者のためのダンス
  - ・予防・リハビリ・治療のためのダンス

- 研究会内容は
- ・ダンス教授法に関する研究会
  - ・コンクールに関する研究会
  - ・ドイツ舞踊に関する研究会

### 3. ドイツ連邦共和国におけるダンス教育

前述でも述べているが、ドイツのダンスにおける組織の構造が非常に複雑なために、正直なところ、ドイツのダンス教育システムのすべては理解することはできなかった。今回の視察ですべてを理解することは困難だったので、今後のためにドイツ連邦ダンス連盟会長のエレマン氏から渡された資料を添付させていただく。

#### ①ドイツ連邦共和国におけるダンス教育

##### 【職業】

- ・ダンス教師（誰でも教える事が出来る）
- ・ディプロマ ダンス教師（ディプロマ資格を所得する教師）
- ・ダンス芸術（舞台の為の）プロダンサー教師
- ・ダンス文化の教師

##### 【教育を受ける場】

- ・大学と専門大学
- ・専門団体（ドイツ連邦共和国ダンス連盟）
- ・一般ドイツ教師連盟

#### ②ダンス教師の教育のためのドイツ文化審議会

##### 【ダンス試問会】

2007年から行われるようになった

- 1 ダンサー資格
- 2 ダンス教育学 ダンス教授学 ダンス方法論
- 3 ダンス解剖学 ダンストレーニング合法論 ダンス運動論 ダンス運動分析  
ダンス心理学 ダンス生理学 ダンス音楽学 ダンスコンポジション
- 4 ダンス関連 推奨分野  
(法律、アート・アドミニストレーションなど)

(吉田まり)

## 4. ドイツで訪問した施設等について

### ローラ・ロゲ・スクール支部

Lola Rogge Schule im Hirschpark

訪問日時：2015年9月1日 11:30~18:00

対応者：校長クリスチャン・メイヤー・ロゲ・ターナー (Christiane Meyer-Rogge-Turner)

#### 1. 施設の概要

1927年、ローラ・ロゲ (Lola Rogge, 1908-1990) により創立された。ロゲは、ハンブルグで1922年にルドルフ・フォン・ラバン (Rudolf von Laban 1879-1958) が設立したダンススクールでダンスを始め、1927年にはラバンのアシスタントとなった。ラバン舞踊団の主要ダンサー、振付家およびダンス教育者として知られていた。

ロゲの夫は、学校のマネジメント、クラスのピアノ伴奏、さらに台本を書くなどして学校の運営を助けた。

ローラ・ロゲ・スクールは、本部がキービッツホッフ (Kiebitzhof) にあり、支部がヒルシュパーク (Hirschpark) にある。2015年9月1日、今回のセミナーの最初の訪問先として、支部 (Lola Rogge Schule im Hirschpark) を訪ねた。学校はエルベ河と北海が会う河口に近い街にある。19世紀初頭にはデンマークの支配下にあったという影響で、北欧風の美しい建物が立ち並ぶ高級住宅地だ。



学校の建物は、もとは富裕な家族の別荘であったもので、緑豊かな公園に臨む、広々とした環境の中にある。古い建物の内部を改装して使用していて、1回にはスタジオが3か所あり、2階は校長の住居となっている。

現校長のクリスチャンヌ・メイヤー・ロゲ・ターナー氏は創立者の娘である。

1977年に経営を引き継いだ。クリスチャンヌ・ロゲはダンサーとしてのキャリアはローラ・ロゲには及ばず、学校経営の後を継ぐにあたり、自分自身の運営方法を考えた結果、しっかりとした正論を基盤としたいと思った。そこで、

創立者にならい、ラバンの原則を取り入れた。

## 2. ダンス教育の実情

学校は、政府の認可を受けた職業専門学校であり、プロフェッショナルな教師を養成することを目的の第一としている。同時にプロを目指さない生徒たち（アマチュア）をプロフェッショナルの教師が指導する場でもある。

本部、支部を通じて、この学校には二本の柱がある。アマチュアの生徒たちのクラス（ここでは一般クラスとする）と、教師養成のクラスである。

一般クラスの開講科目は次のとおりである。

- ・ 幼児のダンス
- ・ 子供のダンス (Kindertanz)
- ・ モダンダンス
- ・ クラシックバレエ
- ・ インプロヴィゼーション (即興)
- ・ ダンシング体操 Tanzerishch Gymnaastik (Dance-based Gymnastics)  
歩く、走る、跳ぶなどの運動を音楽に合わせて行う
- ・ ジャズダンス
- ・ ヒップホップ
- ・ ダンスパフォーマンス制作 (子供のための舞台制作)

教師養成のクラスの開講科目がある。

- ・ ダンスの教師の職業教育 (3年コース)  
3年間でモダンダンス、クラシックバレエ、ジャズダンス、ダンシング体操、即興、フォークダンス、振り付け、音楽理論、解剖学、等を学び、全課程を修了して試験に合格すると、国の認可を受けた教師の資格が習得できる。この資格をもって、自身のスタジオの開設、あるいは、バレエ学校、フィットネスクラブ、体操クラブ、幼稚園、クリニックのリハビリ施設、一般の学校でのダンス教授が可能である。  
1期 2,180 ユーロ、さらに毎月 390 ユーロ、入学金 150 ユーロ、卒業試験 150 ユーロ。  
(2015年9月現在1ユーロは約140円)。
- ・ 教師のための、ダンスセミナー (1年コース)  
ダンス以外の授業を教えている教師が、スポーツの時間やクラブ活動でダンスを教えるために、週2回のセミナーを受け、ダンスに対する理解を深めるためのコース。
- ・ 夏期講習
- ・ ピラティス

## 3. クラス見学

子供のダンス (Kindertanz) 9月1日 (火) 16:00~16:45

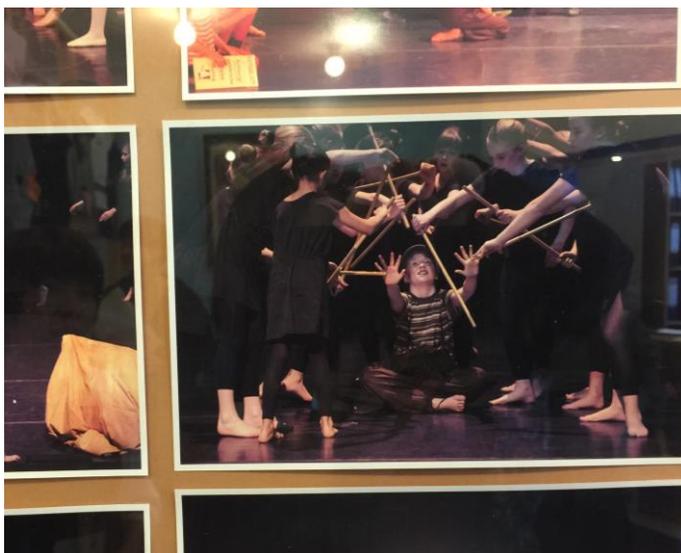
8歳、9歳の女の子9名。経験は9か月から4年間までさまざまである。あくまでも年齢によるクラス分けがなされている。

夏休みをはさんで4回目の授業。授業のテーマは童話『山賊の娘ローニャ』(Ronja Rovardotter)である。この物語は、日本では『長靴下のピッピ』(Pippi Langstrum)の作者として知られる、アストリッド・リンドグレン (Astrid Lindgren 1907~2002) によって書かれたもので、2014年に宮崎吾朗によってテレビアニメ化されている。

主人公である山賊の娘ローニャが、森で化け物たちに出会い、囲まれているところのシーンの練習を見た。長さ50cm、直径1cmほどの細い棒を小道具として持たせる。教師は、始めに足の運びや、棒を持った手の動きを教える。動きが次第に大きくなり、子供たちが慣れてきたところで、動きに意味を持たせ、表情を加えていく。手に持った棒は、攻撃の道具にもなり、防護の道具にもなる。ローニャ役と化け物たちの役を入れ替わりながら、部分を練習し、最後に全体を通して終わった

キンダーダンスと呼ばれる、子供のための表現ダンスのクラスである。指導の内容は教師に任されており、バレエに近いクラスをする教師もあれば、よりモダンダンスに近いクラスをする場合もある。本校では、このキンダークラスにかなり力を入れており、4~5歳、5~6歳、6~7歳、7~8歳、8~9歳、9~10歳、10~11歳という年齢別に分かれている。どの年齢も、週に2度から3度のクラスが用意されているが、ほとんどの子供の受講回数は週1回である。

月謝は一か月7,000円程度。この日の生徒たちはバレエやダンスのクラスはとっておらず、このクラスだけを受けている生徒たちであった。



この『山賊の娘ローニャ』のダンスは、過去に学校の発表会で上演されており、レパートリーに入っているダンスである。子供たちにもなじみが深い作品で、一度上演した作品を授業に用いているので、より親しみやすく、理解しやすいようである。

(写真は、発表会の舞台写真を撮影したもの)

この作品の音楽には、ルネ・オブリ (Rene Aubry) というカナダの作曲家の曲が使われている。クラスのレッスンでは、一部はピアノ伴奏でも行われるが、普段から教師たちが多くの曲を聴いて、動きに合うものを探している。

この授業には、当校で教師養成コースの最終学年の生徒が、実習のためアシスタントとして出席していた。子供たちに直接働きかけるのは担当の教師のみであった。

(本校では生徒や授業の写真撮影が禁止であったため、レッスン風景の写真は掲載なし)

#### 4. 感想

見学したクラスは、テクニックを習得するダンスレッスンというよりは、体を使って表現をするということに重点が置かれているクラスで、教師は「動く楽しみを覚えてほしい。また、与えられるだけでなく、自分自身のアイデアを表現できるようにしたい。」と目的を語ってくれた。日本でクラシックバレエを学ぶ子供たちにもこのような授業を受ける機会があれば、表現力が身に付くだけでなく、バレエのステップの中に楽しみを見つけることができるのではないかと感じた。

このクラスで体を使って表現することに目覚めた子供たちの中から、クラシックバレエ、モダンバレエなどほかのジャンルのダンスに興味をもち、進んでいく可能性もあるとのこと。私自身が日本で教えている普段のバレエクラスの中では、子供たちに自由な発想をさせる訓練も必要と思いつつも、十分な時間をとることが難しく、できずにいるのが現状である。小さいうちから「踊る技術」と「表現」とを並行して学ぶチャンスを持たせることができる環境を作れないだろうか、と大いに考えさせられた。

日本のバレエ教室とは異なり、着ているレオタード、タイツはさまざまで、髪もきちんと結んではいない。特に教師に確かめなかったが、少なくともこのクラスでは、服装、髪型について指導はされていないようだった。



(諸角佳津美)

## フォークダンスグループ 渡り鳥 Zugvogel

訪問日時：2015年9月1日 20:30～22:00

訪問場所：Berner Allee 64a, 22159 Hamburg

対応者：ディータ・クノーデル 指導者

### 1. 団体の概要

1971年、社会性があり人心を掌握することに長けていたベック氏 (Horst Beck) は、「フォークダンスは、ステップを忠実に踏むことが重要である」との考えのもと、団体を設立した。

1977年、アマチュアのフォークダンス/民俗舞踊 (Folklore-Tanzen) のグループ「渡り鳥」を設立。

以来、正当なフォークダンスを学ぶことを通して「踊る楽しさ」を表現するダンスグループとして、国内外で活動するグループとコンタクトを取り、ベルネ スポーツ連盟 (tus BERNE) において、活動している。

現在の総会員数は、80名余り。

### 2. 活動内容

この団体は、「児童舞踊グループ」「青少年グループ」「総合グループ」「舞台グループ」の4つのカテゴリーに分かれて活動している。

#### ①児童舞踊グループ

身体の動きの法則を知ること、年齢に応じた踊りを踊ることに留意し、2つのグループに分かれて活動している。

##### ・第1グループ (4歳～6歳) / (6歳～8歳)

リズムに対する感覚を養う。軽微な即興ダンスやステップの基礎を学ぶ。

易しい児童舞踊を踊るグループ。

##### ・第2グループ (9歳～11歳)

民俗舞踊のステップを踏むための技術と自身の身体のバランスを保つことを学ぶ。

第1グループよりも難易度の高い児童舞踊と易しい民俗舞踊を踊るグループ。

#### ②青少年グループ (15歳以上)

様々な国の民俗舞踊を踊るグループ。

パフォーマンスする際には、民俗衣装を着て、振り付けされた踊りを披露する。

#### ③総合グループ (年齢不問)

他人と共に、民俗音楽で踊る楽しさを知ることが唯一の目的としたグループ。

様々な国のサークルダンス、ラインダンス、ペアダンスを異なるテンポで踊る。

新規入会は、随時可能。

#### ④舞台グループ

男女の舞踊家たちが集中的に訓練して、様々な国の民俗舞踊、そしてドイツの民俗舞踊を披露するグループ。

レパートリーは、ドイツ、チェコスロヴァキア、メキシコ、スウェーデン、ポーランドの民俗舞踊を網羅している。踊りは、卓越した振り付けによって構成されており、民俗衣装を着用して披露する。

海外公演の際には、生演奏によるドイツ舞踊を披露する。

パフォーマンスは、劇場や公園、広場等で催されるお祭りやイベントに参加する形で、1年に8~10回程度行っている。

入会は、随時面談の上、可能。

現在、12歳~14歳までのグループは、存在しない。



### 3. 指導者について

ディータ・クノーデル

(ドイツ連邦ダンス連盟 副会長)

1979年「渡り鳥」に入会。

1984年 グループの創設者であるベック氏の引退と同時に指導者となった。

彼もまた、ベック氏と同じように、「渡り鳥」の指導者として、フォークダンスのステップの質を守り、パフォーマンスの際には、踊っている相手の顔を見ることなど、フォークダンスの規律を守り、加えて、踊ることに対する誠実さが必要であると考えている。更に、受講者に対しては、常に厳格、且つ寛容な態度で臨み真面目に受講させ、その上で「楽しさ」を感じることが出来るように導くことが、ダンス指導者の役割であると考えている。



### 4. 「舞台グループ」の見学及び体験

活動は、建物の1階にある天井が高く、奥にステージがある体育館で行われていた。床は、板張りで若干滑るような感覚があった。僕らが会場に到着した時には、20人前後の男女（女性の方が多い）が、各自で思い思いにステップの練習やフォーメーションの確認等を行っていた。

間もなく指導者のクノーデル氏が現れ、僕らを団員に紹介すると、続いてドイツ連邦ダンス連盟の会長エラマン氏より、団員に対し本事業への協力について、謝辞が述べられた。

その後、クノーデル氏の号令によって、「はた織りの踊り」「ポルカ」など、数種類のレパートリーの練習が行われた。練習も後半に差し掛かった頃、見学していた僕らに、練習への参加が提案され、団員と一緒にダンスを踊ることになった。それは、彼が振り付ける幾つかのシーケンスを即座に覚え、大きな円を作り、団員と一緒に踊ると云うものであった。僕らがようやく振り付けを憶えた頃、CDに録音された音楽を使って、グループのメンバーと一緒にフォークダンスを踊った。



最後は皆で記念撮影を行い、和やかな雰囲気終了した。



## 5. 感想

クノーデル氏による正しいステップの踏み方や踊り手のマナーに対する的確な指導は、決して緊張感が損なわれることのない整然とした雰囲気の中で、楽しそうな笑い声と共に行われていた。僕らは、終始、クノーデル氏のダンス指導者としての手腕に感心していた。彼のフォークダンスに対するアカデミズムは元より、適時生徒一人一人の感情に寄り添い、其々を自立した大人へと導くための手本となるべく振る舞いには、特に目を見張るものがあった。同時に、指導者としての「厳格且つ寛容な態度」が、「ワンランク上の楽しさ」を教えるための絶対必要条件であることを再認識した。

ところで、プロフェッショナルのダンス指導者である彼は、大人を対象としたレッスンにおいても、社会人としての規範をしっかりと示した上で技術指導を行っていた。それは、そうすることにより熟成した上質なダンス文化が、やがて人間社会の豊かさ即ち社会的財産になり得ることを十分に理解しているからであろう。

「渡り鳥」の活動の視察においては、「社会におけるダンス教師の役割」について、深く考えさせられたところである。

(野村一樹)

# ハンブルグバレエ学校

Ballettschule des HAMBURG BALLET

訪問日時：2015年9月2日 11:00~18:00

対応者：Indrani Delmaine（学校監督管理コーディネーター兼教師）

## 1. 施設の概要

1978年、ジョン・ノイマイヤー（John Neumeier 1942-）により創立された私立（財団法人）のバレエ学校である。

彼は米国出身のバレエダンサーで、シュトゥットガルトバレエ団のソリストであった。1967年ハンブルグバレエ団の芸術監督に就任し、自身の振り付けを理解し、踊れるダンサーを育てる目的でこのバレエ学校を創った。

ハンブルグバレエ学校は、ハンブルグ中央駅から約20分電車に乗り Hasselbrook 駅下車8分の場所にある。校舎は町の大通りに面しているが静かで落ち着いた場所である。



学校の建物は、ハンブルグの有名な設計家フリッツ・シューマッハー（Fritz Schumacher 1869-1947）によるもので、建物の中央に吹き抜けの大きな階段がある。

寮も完備されており、現在定員35人の生徒を10人のチューターがみている。（近々に新しく寮を建設予定。）

この建物の中には、ハンブルグバレエ学校の他に、ハンブルグバレエ団、ドイツ連邦青年バレエ団が存在し、いずれもジョン・ノイマイヤーによって創立された組織である。このため生徒たちはバレエ学校で質の高い教育を受けながら、バレエ団が上演するコンテンポラリー作品を見るチャンスにも恵まれている。

3つの組織が共有するスタジオのそれぞれには、「ニジンスキー」「プティパ」「バランシン」「ブルノンヴィル」「チューダー」など、偉大なダンサーや振付家の名前が付いている。

## 2. ダンス教育の実情

この学校は、1年生（10歳~11歳）から8年生（17歳~18歳）まで約170名の生徒が在籍している。生徒は皆、地域の学校へ通いながら放課後この学校で、将来職業としてダンサーを目指している。ドイツの教育システムは州によっても異なるが主には日本の小学校に当たる基礎学校（グルントシューレ）に4年通った後、日本の中学校にあたる学校（義務教育）として、進学コ

ース（ギムナジウム）か、工業職人訓練学校（ハuppトシューレ）か、手工業職人訓練学校（レアルシューレ）にいずれも5年から6年通う。生徒はこれらの学校とバレエ学校のレッスンを両立させている。



1クラスは1時間45分から2時間のクラスが、1年生では週2回、2年生以上は週5日のレッスンになる。義務教育の終わる7、8年生は「シアタークラス」と呼ばれ、より専門的内容を学び、卒業試験ではディプロマが与えられる。

この他に準備クラスとして、6歳から9歳までの1年生未満の子に週1回から2回のレッスンが提供されている。この子供達は体験レッスンに参加した後、音楽的、身体的にふさわしいと判断され選抜された子供達である。

この学校は海外でも名前の知られた学校であるため多くの留学生希望者があり、実際に多くの優秀な留学生を受け入れている。

卒業生の99%が国内外のバレエ団に入団する。定員は60名のハンブルグバレエ団では、80%がこの卒業生である。昨年もアントワープ、ブリュッセル、ロイヤルデンマーク・バレエ団、ベルリン国立バレエ団、ボン・オペラバレエ、デュッセルドルフ、フランクフルト、等々に入団させている。

ダンスクラスの開講科目は次のとおりである。（クラシックバレエ以外は主に7、8年生）

- ・クラシックバレエ・・・7、8年生は毎日
- ・パ・ド・ドゥ
- ・モダンダンス・・・週2回
- ・キャラクターダンス・・・毎週ではない。やる週は毎日続く。
- ・ポワント（女性）
- ・ジャンプ、バットリー（男性）
- ・コンポジション（創作）・・・8年生のみ
- ・ダンスの歴史
- ・解剖学
- ・音楽理論

費用については以下の通りである。

- ・準備クラス・・・ユーロ 550/10 ヶ月
- ・1年生～6年生・・・ユーロ 500/10 ヶ月～ユーロ 1,800/10 ヶ月
- ・7、8年生は無料（留学生を含む）

※寮費・・・ユーロ 5,850/年

この学校では、将来プロのダンサーを目指す生徒の育成に力を入れている一方、ダンス以外の様々

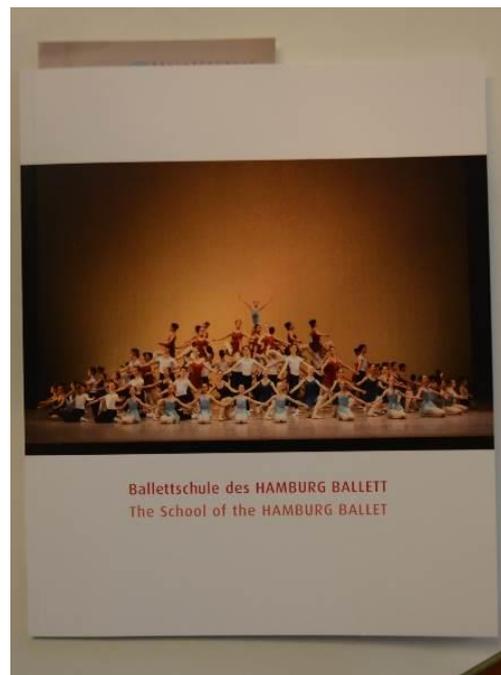


なことに興味を持ち、協調性のある生徒を育てることに重点を置いている。教師は一人ひとりの生徒に対して親のような気持ちで接し、自分で考えて行動できる一人前の人間になることが何より大切とノイマイヤー氏の考えである。そのとおり廊下ですれ違うどの子も清々しい笑顔で挨拶を交わしてくれることが印象に残った。

### 3. クラス見学

以下の7クラスを見学した。見学時間は1クラス15分～50分。

- ① クラシックバレエ 2年生女子 (7名)
- ② クラシックバレエ 2年生男子 (6名)
- ③ クラシックバレエ 4年生女子 (8名)
- ④ クラシックバレエ 7、8年生男子  
(19名、見学者1名)
- ⑤ クラシックバレエ 8年生女子  
(10名、日本人留学生3名)
- ⑥ モダンダンス 8年生男女  
(男子12名、女子7名、見学1名)
- ⑦ 作品リハーサル『Yondering』7、8年生男子  
(12名、見学6名)



クラシックバレエのクラスは、どのクラスも夏休み明けの新学期が始まったばかりとのことで、実にシンプルな内容であった。ワガノワメソッドによつてのレッスンで、いずれのクラスも教師1人とピアニスト1人の生演奏によつて進められていた。レッスン曲の選曲は、子供たちが楽しくレッスンできるよう、バレエ

クラシックバレエのクラスは、どのクラスも夏休み明けの新学期が始まったばかりとのことで、実にシンプルな内容であった。ワガノワメソッドによつてのレッスンで、いずれのクラスも教師



1人とピアニスト1人の生演奏によって進められていた。レッスン曲の選曲は、子供たちが楽しくレッスンできるよう、バレエ音楽やクラシック音楽に限らず、色々な曲を使用している。4年生女子のクラスでは、日本のポップスも使用されていた。教師は実際に生徒に触れて指導したり、自身が床に寝転がって生徒の間違いをわかり易く真似てみせたり、細かな指示を与え、決して複雑ではない動きの流れを、身体の細かな部位を意識させながら進める。そしてそれがきちんと出来ているかに重きを置いている。

クラシックのクラスでは生徒達のレッスン着は学年ごとに色が決められており、みなきちとした服装と、女子はきれいに髪をシニオンにまとめている。

モダンダンスの指導はニューヨーク出身のステイシー・デナム (Stacey Denham) がホートンテクニックに基づいて指導していた。(日本人の女性がピアニストを務めていた。)彼女のクラスは淡々と進められるが、生徒たちはクラシックとは勝手の違う動きに戸惑いながら果敢にチャレンジしていて、好感が持てた。この「シアタークラス」でさえも指導される動きを器用に踊る生徒と、てこずっている生徒の両方が見うけられた。

カナダ国立バレエ学校の生徒向けにジョン・ノイマイヤーが振り付けた『Yondering』のリハーサルでは、米国出身でハンブルグバレエ団のダンサー(1977年プリンシパルに昇格)であったケヴィン・ヘイゲン (Kevin Haigen) が直接指導していた。現役のダンサーのように動きはしなないが手の動きや息使いなど細かなニュアンスを実際に動いて示していた。特に「スロー、クイック、クイック、スロー」と動きを声に出させてリズムをとらせたり、背中を丸めるポーズをとらせるときには「んー」と自身が言いながらお腹が震えることを感じさせたりなどの具体的な指示をしていたのが興味深かった。彼の指示のもと、生徒達の動きは徐々に意味を持ち始めていった。ちなみに彼は現在、この学校での指導のほかに、2011年に新しく設立されたドイツ連邦青年バレエ団を牽引している。

この作品は1996年にトロント(カナダ)で初演されたバレエ作品である。音楽は、19世紀アメリカを代表する音楽家スティーブン・C・フォスター (Stephen Collins Foster 1826-1864) の『金髪のジェニー』、『夢見る人(夢路より)』などが用いられている。



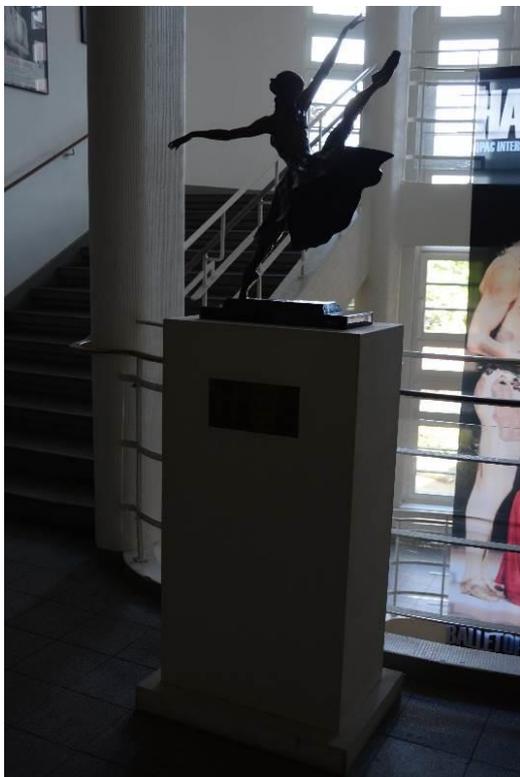
なお、『Yondering』とは、19世紀アメリカの西部開拓時代において、フロンティアを超えて

未開拓の地をさ迷い歩く様を意味している。

(本校では生徒への写真撮影が禁止であったため、レッスン時の写真は掲載なし。)

#### 4. 感想

2年生から最上級の「シアタークラス」の生徒達まで、幅広いクラスを見学することが出来た。いずれクラスも、夏休み明けの新学期とはいえ、クラスの内容はどれもシンプルで基礎の習得に重点を置いていることがうかがわれた。私を含め日本のバレエ教室のほとんどが、同年代の子供たちに、もっと高度な技術を要求していると思われる。日本の指導者は、難しいテクニックを指導しないと子供たちの興味がそげることを恐れる傾向にあるようだが、ここの先生たちは、粘り強く何度も同じことを繰り返しさせていた。しかし、それは生徒が退屈になるものではなく、その具体的な指摘にどんどん生徒が食いついて行くように感じられ、私自身とても参考になった。



また、コンテンポラリー作品のリハーサルやモダンダンスでは、クラシックバレエクラスのように中心的存在だった子が、むしろあたふたとし、逆にクラシックバレエクラスではさほど目立たなかった子が、生き活きと踊っているのが印象的だった。日本では大抵、器用な子が何でもこなしてしまう傾向があり、これだけの違いは見られないのではないかと感じる。身体の動かし方だけでなく、音の取り方などそれぞれに個性が感じられた。クラスの最中、生徒達は自分が動いていない間、仲間の動きを注意深く見ており、それぞれの生徒が、自分や仲間の個性を尊重しあっていることを強く感じられ、それもこの学校で留学生が伸び伸びと育つ理由だと思えた。

この学校では、教師と生徒の関係が密接で、フレンドリーな感じを持った。生徒はみな明るく、日本での“師弟関係”といったものは感じられない。留学生も多いためか、ここでは習う

生徒側が主役で、教師陣は彼らを暖かく見守っているように強く感じられた。

しかし、残念ながら自国ドイツの子供たちは7、8年生まで続く生徒が少なく、「シアタークラス」には優秀な留学生が目立つ。それは近頃、ドイツの教育システムが変わったことが大きく影響しているとのことだった。以前は義務教育学校の終了時間が午前中であったのが、午後遅くになったため、芸術、スポーツなどの学校との両立が難しくなっているとのことである。

日本でも進学のためバレエを諦めるなどの話はよく聞くが、これだけの実績を持ち、環境も整い、就職率を誇る、ドイツのバレエ学校でさえも、私達日本の私設バレエ教室と同じ悩みを抱えていることに驚かされた。

(若佐久美子)



## ハンブルク観光

2015年9月3日

### 1. ハンブルク市内観光

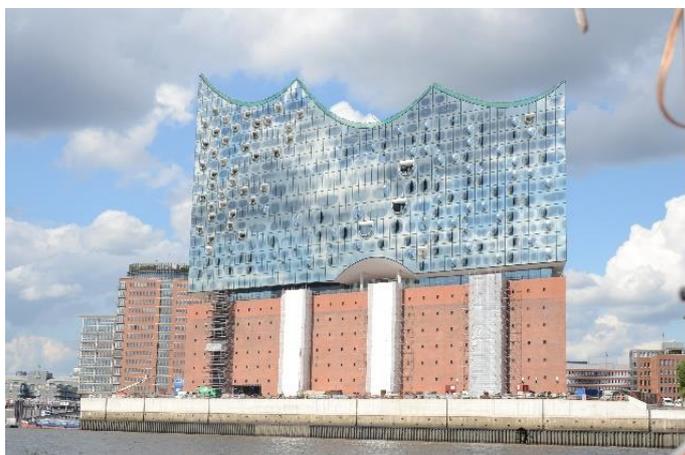
この日は、本来「Willkommen am Gymnasium Hummelsbuttel」への訪問予定であったが、学校教師の急な怪我のために、残念なことに学校訪問がキャンセルとなった。そのため、ハンブルク市内の観光へとスケジュールが変更された。

ホテルから、バスと電車を乗り継ぎ、ハンブルクの中心街「センター」と呼ばれる場所に移動する。歩きながら、まずは後の集合場所の確認へと向かう。「センター」はホテル周辺とは違い、デパートや専門店など、多くの店が続いている繁華街だ。集合場所を確認してからも暫く全員で移動する。

途中には大きな教会（HAUPTKIRCHE ST.PETRI）があり、内部を見学する。現代的に見えるパイプオルガンが印象的だ。さらに進み、大きな存在感で建立する市庁舎へと向かう。重厚な建物の中に入ると広々とした吹き抜けになっており、中央に広がる階段も太い柱も歴史を感じさせている。

その後、2時間程度の自由行動となる。昼食も各自となるため、昼食代の支給も受ける。

湖の脇の通りの出店を見て回る人、美術館で時間を過ごす人、商店街に買い物に行く人、思い思いに市内を散策する。集合時間に再会して、電車で移動。次には、水の都らしい船での観光を用意してくれていた。



移動する。ハンブルク料理を楽しんだ。

夕食後には、市内と対岸を結ぶ海底トンネルを見学した。100年以上前に造られたにも関わら

船からは、現在は様々な博物館になっている歴史的な建物、水面から伸びる建物を支える木製の柱、建築途中のモダンな劇場ビル、世界中から集まるコンテナ群、大型客船などを左右に見ることができ、爽やかな風を受けての観光がつづいた。

観光の船を降りると、船上レストラン（Rickmer Rickmers）へ

ず、人のためのリフトと、車のためのリフトが3機も並んでいる。海底には片側1車線の道が直線に走り、今も利用者が後を絶たない。

再び電車で移動し、偶然にもこの期間にハンブルクで公演が行われていたサーカスへ向かう。是非我々に見てほしいとのことで、チケットを予約して下さったのである。

## 2. サーカス鑑賞 「RONCALLI」

エレマン氏の自宅のあるケルン州に本拠を置くサーカス「RONCALLI」だ。

会場に近づくと赤・青・黄色が目立つ大きなテントが現れてきた。チケットもぎりの男性も独特な衣裳を身に着け、開場前から我々を楽しませてくれる。

ゲートの中に入ると、一つ目のテントに入っていく。そこはきらびやかな彩りの売店で、出演者たちが笑顔で出迎えてくれた。さらに進むと、まるで映画に出てくるような懐かしい雰囲気のある本会場テントとなる。テント内には、中央に馬蹄形の舞台があり、周りを客席が囲んでいる。

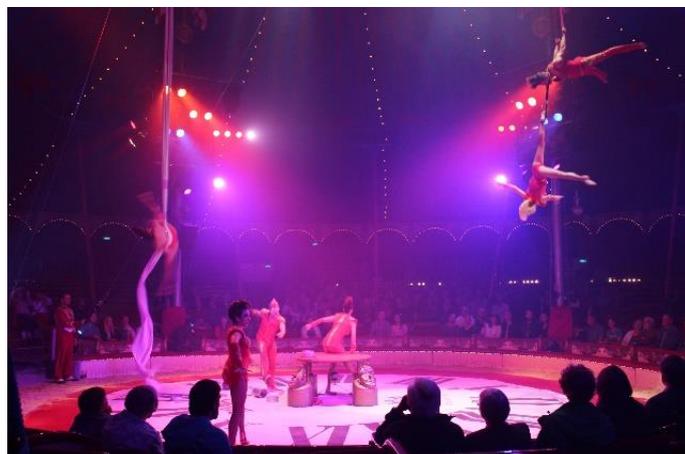


開演すると、男性4人、女性1人のピエロが場内を沸かし、公演を進めていく。鉄棒、ポール、リフティング、力技、大小多頭の馬の芸など、様々なサーカスが繰り広げられた。間近で見る演技は迫力があり、観客をハラハラ・ドキドキさせたり、時には大笑いさせたりと、隙間なく続く。

舞台奥の2階では専属のオーケストラが、演者のパフォーマンスのタイミングに合わせ演奏する。この効果的な音は、観客の心をさらに沸き立たせていた。

客席は満席ではなかったが、子供からお年寄りまで様々な年齢層が一緒に楽しんでいた。私たちも、童心に返り、楽しい時間を過ごすことが出来た。

(成澤千佳子)



## ローラ・ロゲ・スクール本部

Lola Rogge Schule im Kiebitzthof

訪問日：2015年9月4日 10:30~17:00

対応者：クリスチャンヌ・メイヤー・ロゲ・ターナー（校長）

### 1. 施設の概要

9月1日に訪ねたローラ・ロゲ・スクールの本部にあたる。こちらの建物も緑多い自然の中に建っている。この建物は学校のために建てられた建築なので、支部に比べると現代的である。内部も長い廊下に面して教室やスタジオが並ぶ、学校らしい作りとなっている。



### 2. ダンス教育の実情

本部校舎では、朝から午後2時、3時くらいまでは教師養成のための講座が行われており、その後、夜の9時くらいまで子供のクラス、アマチュアの大人のクラスが続く。

養成部門で行われている授業数は、45分授業を1単位と考えて、1週間に32単位分である。学年にもよるが最も多くの時間が割かれているのがモダン・ヨーロッパ・ダンスである（1年生で9単位、2年生で8単位、3年生で6単位）。ジャズダンス、クラシックバレエが各学年4単位、フォークダンスが3単位、インプロヴィゼーション及び創作が2単位等となっている。

教師のためのダンスセミナー（1年コース）も、夜の7時から9時に講座があり、受講生は週に2回、全部で4時間を受けなければならない。

支部の項で紹介したように受講料は決して安くはないので、学生たちは休みの日を使ってアルバイトをすることが多い。ハンブルクの市外から通っている学生が半数を占めるため、3年間をやり遂げるには親からの援助にかなりの部分を頼っている。

学校として、ハンブルク市から助成を受けているが、その助成金で支援できる対象はハンブルク市に住所のある学生のみ。市に申請をして支給される助成金の額は、該当の学生の人数によって毎年異なる。

政府の認可を受けていることによるもうひとつの優遇制度は税金に関わることである。費用を親が負担している場合は30%まで、自分で費用を出している場合は毎年4000ユーロまでが非課税の扱いを受けることができる。

### 3. クラス見学および参加

①即興のクラス 10:45~11:30

クラス担当教師は校長のクリスチャンヌ・メイヤー・ロゲ・ターナー  
養成コース1年生の8名に研修員4名（吉田、野村、松村、若佐）が参加。

今日のクラスのテーマは、名詞で言えば「粋、道理、把握、理解」、動詞として考えると「手にとる、把握する、理解する」である、と教師からの説明があった。

最初は個別に動く。足は動かさず、上体と腕を使って様々な動きを試みる。次に片足だけ解放し、最後には両足も自由に動かすことができるなかで立つ、座る、移動する、等の動きを見いだしていく。次に、2人組になり、さらに3人組になって、互いの動きを見ながら、共に動いたり、反発したり、時には孤立したりしながら音楽に合わせて止まらずに動きをつなげて行く。教師からは、途中で、もう少し大きく動くことと、どういうふうに関手の手をとるか、互いを感じ合いながら動くようにという指導がされた。



授業の最後に、8名の生徒と数分間だがディスカッションの時間を持つことができた。19歳から24歳まで年齢はバラバラで、出身の町も異なる。ダンスの経験は13年から20年といずれも長い。これまでに経験したダンスは、クラシックバレエ、新体操、ジャズダンス、キンダーダンス、ヒップホップなど人それぞれである。

「自分にとって踊るとはどういうことか」という質問に対し、「感情表現の手段だと思う。いろいろな様式を使って違う表現ができる。」「生きている楽しみ。」「自分の一部だと感じている。」という回答があった。

この解答こそが、学校が生徒に伝えたいと考えていることである、という校長からのコメントがあった。



## ②モダンダンスクラス 11:30~12:15

指導者：カーチャ・ボルシュドルフ(Katja Borsdorf)

養成コースの2年生7名に研修員3名（野村、松村、若佐）が参加。

ここでは、特に決まった曲に合わせたダンスではなく、4かける8カウントくらいの長さのエクササイズを行った。エクササイズにはホートンテクニックの要素が多く使われているが、教師がオリジナルの動きを組み合わせている。必ず両サイドを行い、フロアを使うことをテーマとしている。

この授業を受けている生徒達は、教師になって「踊る楽しさを伝えたい。また、踊りにふさわしい身体条件を持ってない人にも教えたい。」と語っていた。彼ら自身が、自分はクラシックバレエのプロのダンサーのレベルには達していないが、踊ることが好きでそれを伝えたいから教師を目指している、という自覚を持っている。この学校で様々なダンスの訓練を受けるが、その中から何を選択して、どの方向に進んで行くかはまだ分からない。この学校の教師陣をみると、一人の教師が何種類かのダンスを担当していることが多い。

例えば、このクラスを担当していたボルシュドルフ氏はインプロヴィゼーション、創作、自由ダンス、方法論などの授業も受け持っている。生徒達には、このように複数のダンスを教える教師になるという可能性もある。



### ③フォークダンスクラス 12:30～13:15

指導者：ディータ・クノーデル

養成コースの学生14名に研修員4名（吉田、野村、諸角、成澤）が参加

基本の体重移動やステップを練習した後、ポルカを踊った。フォークダンスは民族舞踊として伝わって来た踊り

で、ステップの基礎と音楽を学ばばある程度の自由が許される。キャラクターダンスは、民族舞踊のリズムやステップを取り入れた踊りであるので、フォークダンスとは異なる。

この学校の教科の中にはキャラクターダンスがないが、キャラクターダンスはクラシックバレエの一部として認識されている。学校に来て初めてフォークダンスを学んだが、やってみてとても好きになったと言う学生が多かった。

このクラスにも、実習生がひとりアシスタントとして参加していた。



## 4. 感想

2回に分けて、本部と支部を見学した。一般クラスは、学校と言うよりも日本のカルチャーセンターに近い印象を持った。通いやすい地域に住んでいる子供達が、通いやすい時間帯に週に1回か2回、楽しみに通っている。

バレエのクラスとしては準備クラス(Ballet Vorbereitung)があるが、8から10歳が対象で、それ以前には、3、4歳児の為のダンスの早期教育(Tanzerische Fruherziehung)を経て、子供のダンス(Kinder Tanz)があるのみである。

日本では、3歳、4歳の子供でもバレエとしてポジションを教えたり、ステップを教えたりするが、ローラー・ロゲ・スクールのように、準備段階で音楽に親しませたり、自由に身体を動かすこと、表現することの楽しみを覚えさせたりする為に、もう少し時間をかけるのも良いのではないかと感じた。日本のダンス教育は、個人のスタジオや教師にまかされている為に、早くテクニックをつけさせてコンクールで結果を出し、評判をあげる、というような風潮が出てしまっているように思う。また、教師の方にも、小さな子供にとって何が必要で、それをどのように教えれば良いかという知識はあまりなく、自分の経験に基づいて教えているのがほとんどなので、幼児教育に関する勉強をもっとする必要があるのではないだろうかと思う。

養成コースでは、ダンスの教師になろうとする人達が、必ずしも踊りのプロとして舞台に立って来た訳ではないことに興味深く思った。ローラー・ロゲ・スクールのような養成学校は、国内にいくつか存在する。こうした学校を卒業し、教師の資格を取った人達は、ダンス専門の学校に就職することもあるが、通常の学校の体育の授業の一環としてダンスを教える場合もある。ダンスの教師だけでは十分な収入が得られない場合には、普通に就職をして、フリーランスのダンス教師として学校や、スタジオで働くこともあるとのことだ。

日本では、バレエを続けるために、バレエを教えて生活費をまかなう、というかたちで生活しているダンサーが多い。一方で、ドイツには、踊ることが好きだけれどプロになる程の実力はないので、教師になって踊る楽しみを伝えたい、という気持ちで教師になろうとする人がたくさんいる。

日本に最近増えている舞踊科を備えた大学には、学生はどういう動機で入学してきたのであろうか。また、そういった大学で勉強した後に、どんな進路があるのか、更に掘り下げて比較してみたいと思った。

(諸角佳津美)

## バーベキューパーティー（歓迎会）

開催日時：2015年9月5日

開催場所：クノーデル邸 Krogerkoppel 43a D-22393 Hamburg

主催者： ディーター・クノーデル (Dieter Knodel)

### 1. 施設の概要

ドイツのハンブルク市の郊外にあるクノーデル邸は閑静な住宅街の中にあつた。木々の緑に囲まれた、テニスコートが一面取れるほどの庭を抜けると、日本の一般的な住宅の玄関と変わらないそれがあつた。白が基調の2階建の家屋は、1階にキッチン、リビングダイニング、夫妻の寝室、2階に子供部屋、1、2階ともにバスルームがあり、それぞれの部屋で生活するために必要なものがきちんと整理された清潔感のある住まいであつた。



### 2. 歓迎会&バーベキューパーティー

午後5時。午後のミーティングの後にホストファミリーが到着。訪独団のメンバーは、それぞれお世話になるホストファミリーのお宅に挨拶に伺った後、再び各ホストファミリーの方々と共にクノーデル邸に集まつた。

午後5時半過ぎ。リビングにて、クノーデル氏より訪独団に対し、歓迎の挨拶が述べられると、引き続きドイツ側のホストファミリーの紹介がなされた。その後、訪独団団長の吉田氏が歓迎会を開いて頂いて下さったことに対する謝辞を述べ、メンバーが個別に自己紹介を行った。

形式的なことが一通り終わると、バーベキューパーティーへと移行した。パーティーにはホストファミリーの方々以外に、「渡り鳥」のメンバーも参加して下さっていた。料理は、ホストファミリーの方々によって用意されていた。ソーセージにビール、数種類のチーズに手作りのソース、デザート等、ホストファミリーの方々の心の込められたもてなしの数々だった。クノーデル邸の庭にはバーベキューセットが準備されていたのだが、天気が崩れ次第に雨脚が強くなり、急遽屋内でのパーティーとなった。

### 3. 即席の公演（フォークダンスグループ「渡り鳥」）

食事も一段落した頃に、クノーデル氏が、自ら率いるフォークダンスグループ「渡り鳥」のメンバー数人（男性1人・女性3人）と共に、自前の民俗衣装に身を包み、リビングに姿を現した。ハウスパフォーマンスとも云うべき即席の公演では、渡り鳥のレパートリーでもある西ドイツの伝統的な踊りやクノーデル氏の創作作品が、CDの音楽を使って披露された。1曲踊り終わる毎に、作品の解説を入れるというスタイルで行われた。



#### 歌曲の合唱

即席の公演が終わると、今度は渡り鳥の女性メンバーの1人が、リビングの椅子に座りギターを弾きながらドイツの伝統的な歌曲を歌い始めた。やがてそれはホストファミリー全員の歌声と広がった。聞こえてきた歌曲の中には、我々が幼い頃に学校で習ったものもあり、ドイツ語と日本語が入り混じる華やかな合唱となることもあった。パーティーの最後は、訪独団のメンバー全員で「上を向いて歩こう」を披露し、エラマン氏、クノーデル氏、そしてホストファミリーの方々へ、心からの感謝の意を表した。

### 4. まとめ

本事業のパートナーであるドイツ連邦ダンス連盟の会長エラマン氏と副会長クノーデル氏の計らいによって開かれたパーティーは、単にホストファミリーと訪独団との親睦に止まらず、ドイツの伝統的な民俗舞踊や音楽の楽しみ方など、一般大衆レベルにおける芸術環境を知る上で、大変に貴重なプログラムであったと思う。 (野村一樹)



## 第10回 Laboer 民族衣装祭

Besuch des 10. Laboer Trachtensommer

訪問日時：2015年9月6日 12:00～15:00

### 1. キールと Laboer フェスティバルについて



今回、私たちのハンブルグでの研修のすべてを案内してくださったクノーデル氏の運転で、ハンブルグから約1時間半かけてキール (keil) という町に到着する。キールはバルト海キール峡湾に面した人口が23万人、面積は約120平方キロメートル、ドイツ最北端に位置している。世界最大級のセーリングイベントである、『キール・ウィーク』が開催さ

れる町だけあって、ヨットハーバーには、大小さまざまな豪華ヨットが並んでいる。高級リゾート地といった雰囲気の間静な町である。

キールは1283年に、ハンザ同盟に加入していたがフレンスブルグとリュベックという2つの町に挟まれていたため、大きく発展することはなかった。どこかハンブルグなどとは異なる雰囲気があるのは、デンマークに帰属していた歴史があるからであろう。

第二次世界大戦によって町の80%以上が破壊されたため、現在の町並みの多くの部分は、その後再建されたものである。

この日に行われた Laboer 民族衣装祭は、シュレースヴィヒ=ホルシュタイン州の民族衣装連盟が主催する伝統的な衣装のお祭りである。参加者はこの周辺の多数の地域から、それぞれの歴史的な衣装を纏って参加し、まずは町をパレードして衣装を披露する。一番の盛り上がりは、その後の広場でのフォークダンスである。参加者たちは自分たちの地域それぞれの衣装を誇らしげに、今度は踊りを披露する。

この衣装祭は、毎年1回開催されている。加盟団体数は定かではないが、その中から今年は、12チームが参加していた。

### 2. フォークダンスについて

私たち日本人にとってフォークダンスとは、欧米のものというイメージがあるが、実際には土着の踊りの総称である。日本のものでいうと、盆踊りや、神楽もこれに分類されるらしい。

私たち日本人が学生時代の記憶にあるフォークダンスは、アメリカから入ってきたものが多いようで、主にレクリエーションとして行われる多人数のダンスが思い浮かべられる。だが、世界中にある、昔から踊り継がれてきたものは、それぞれに特徴ある音楽やステップを持っている。

ここでのフォークダンスとは、ドイツの民族舞踊をさしている。

このフェスティバルは主に伝統的な民族衣装のお祭りなので、参加者のダンスのレベルは決して高くはない。ダンス素人の子供からお年寄りまでが集って楽しくおどるお祭りである。

ドイツのステップの特徴には、「レンドラー」（ゆっくりなワルツ）、「ワルツ」、ボヘミア（現在のチェコ西部）からきた「ポルカ」などがある。

現在ではそれらをきちんと伝授する場が少ないことから、連盟のクノーデル氏はこれらを正確に伝えられる指導者の育成が必要だと語っていた。

踊りには、古くからあって受け継がれているものと、それらのステップを入れて、新しく振付けられたものがある。

今回見られた衣装は伝統的なものであったが、現在のダンスメインの場面では、伝統的な雰囲気を残しながら、ダンスが踊りやすく動きやすいように、衣装の裾が短くなっているものや、素材が軽いものなどに変化しているようである。

### 3. フェスティバル見学



前日の大雨はすっかり上がり、晴れ晴れとしてはいるが海が近いせい肌寒い中、参加者は1時間も前から集まっていた。

楽団が先頭で演奏しながらスタートしたパレードは、13時から約30分間、それぞれの地域ごとに列を作って、小さな町の中をゆっくり練り歩いた。

1つのグループが大体2~30人位の集団で、小さい子を乗せた乳母車のような車を押し、地元の花で作った花輪を掲げて歩くグループもあった。

私たちは沿道で見学。参加者たちも、まったくの一般人なので、カメラを向ける私たち観光客に、恥ずかしそうに手を振っていた。

参加者の年齢は、どのグループも同じ様な感じで、子供からお年寄りまで幅広いが、10代や20代の若者は少なかった。

衣装は、昔、裕福な農民が貴族の服装を真似て作ったものが基になっている。未婚の女性の衣装は、スカート、エプロン、帽子などが白色であり、既婚女性の衣装は黒色であることが特徴だ。



衣装の飾りは細かい刺繍がされているものが多く、デザインは先祖から受け継いだものもあれば、それらに習って新しく作られたものもある。

靴は今回のフェスティバルでは男性、女性ともに黒い革靴を履いていたが、昔は皆、木靴だったらしい。

パレードを終えた参加者が広場に集まると、主催した連盟の代表者が各地域の名前を呼び、それぞれの団体を紹介する。するとグループごとに手をつなぎ、広場に集まっている観客に挨拶をするところからダンスは始まる。

曲が始まると、グループを超えて参加者が全員で手をつないで、大きな輪になり踊りだした。子供も大人も参加できるダンスからスタートした。数曲全員で踊った後には、それぞれのグループごとに集合体を作り、それぞれ個性的な踊りを踊っていた。

広場の周りには、地元の人や、わざわざハンブルクなどから見に来た観客で埋め尽くされていた。

それぞれのグループは、30分位踊ると一旦解散した。参加者は、衣装を着たまま、このイベントのために出ている露店で腹ごしらえをしながら休憩する。私たちは次の予定のため、広場でのダンス終了時にこの町を離れたが、参加者たちは、この後は海辺にあるステージの上で、各グループは再びダンスを披露するらしい。

凝った振付を踊っているグループもあったが、フォークダンスのステップが正確に踊られていないことを、クノーデル氏は嘆いていた

#### 4. 感想



伝統衣装のお祭りとはいえ堅苦しい雰囲気は全くなかった。日本でいうと、浴衣を着て集まって盆踊りを踊り、露店でラムネを買って飲みながら歩いている様子に似ている。私たち日本人も盆踊りを正確に踊れる人は数少ないと思うが、浴衣を着て、盆踊りの輪に入って、なんとなく踊ることが、とても楽しめるのに近いものがある。

今回、3日目に訪れた先で、「日本の踊りを踊ってくれ」といわれ、私の地元の民謡の『安来節』を踊ってみせた。これも決して正確なものではなく、地元の伝統芸能なので、見覚えたものに過ぎない。これが非常に好評で、この後行った先々で、また踊ってみせてほしいと言われるようになったほどだった。『安来節』の師範に言わせれば、こんなものを『安来節』とってもらっては困るというレベルである。しかし、そんな踊りでも、ドイツにない異文化として受け入れられたのであった。

ドイツ連邦ダンス連盟のクノーデル氏は、フォークダンスの専門家として、フェスティバルで踊られている踊りが、正確さに欠けることを非常に問題視していたが、この参加者が、実に楽しそうに踊っていること自体が、見ている私たちを楽しませてくれたと思う。

ダンスのテクニックを正確に伝授することはもちろん重要である。しかし、それ以前に、踊ることは人が集い心通わせることなのではないかと、私自身は踊りの原点に立ち返った。

今では、夏祭りで盆踊りを踊る風習も、私の子供のころから比べると、格段に減っているが、徳島県の『阿波踊り』や、富山県の『盆の風』など、町おこし的に観光客を集めて、継承されているものとの二極化が進んでいる。

このドイツのフェスティバルも、今のスタイルがこの先何十年も続くことを願うとともに、一方では、クノーデル氏の言うように、正確な踊りを受け継ぐ活動は活動で大切だと思う。ダンスには、このような二面があるということ、改めて感じた。

(若佐久美子)



## リューベック（文化世界遺産のハンザ同盟都市）

訪問日時：2015年9月6日 17:00~22:00

### 1. リューベック概要



Laboer 民族衣装祭が開催されたキールを後にして、再びクノーデル氏の運転で1時間20分位かけて、リューベックという町へ向った。リューベックは北ドイツの代表都市で、面積は214平方キロメートル、人口約20万人の小さな町である。

ハンザ同盟の盟主だったリューベックは、14世紀に最盛期を迎えたほど裕福な町であった。そのため個人の邸宅を始め、市庁舎や教会、修道院、福祉施設などの建物は、商人たちが得た利益をふんだんにつぎ込んで作られている。

「人類の歴史上重要な時代を例証する建築様式、建築物群、技術の集積または景観の優れた例」として、1987年に文化世界遺産に登録されている。

リューベック出身の著名な人物には、1929年に『ブッデンブローク家の人々』でノーベル文学賞を受賞し

たパウル・トーマス・マン（Paul Thomas Mann 1875-1955）がいる。

### 2. 市内観光

#### ① 聖マリア教会

ハンザ商人の富を象徴して作られた聖マリア教会は、1250年から100年もの月日をかけて建設された、大きなパイプオルガンがある教会だった。





このオルガニストであったデー  
トリッヒ・ブスクデフーデ  
(Dieterich Buxtehude 1637 ? -  
1707) の演奏を聴くため、1705 年  
20 歳のヨハン・セバスティアン・バ  
ッハは 400km も歩いてやって来た  
という有名な話が残っている。教会  
の中には、その話を伝えるレリーフ  
があった。

教会の塔の鐘は、第 2 次世界大戦  
中に、イギリス軍の爆撃によって破壊されたのだが、協会の再建時にはその悲惨な歴史を忘れないようにとの思いで、塔の真下に落ちた鐘は当時のままの形で残されることになった。

また、ステンドグラスの絵柄にも注目すべきもの  
がある。14 世紀頃、ヨーロッパではペストが大流行  
し、多くの死者が出たため「人生は短く、いずれの  
人も死に向わなければならない。刻一刻と死を心に  
刻みつつ生きていくべきである。」との思想が生まれ  
る。そのため、この教会のステンドグラスにも骸骨  
などが不気味な絵が目立っていた。一般的には、イ  
エスキリストの誕生や天使たちの様子など明るい題  
材が多いが、ここのステンドグラスには、グロテス  
クな骸骨が明るく多彩なガラスによって描かれてい  
るため、より不気味な雰囲気が漂っていた。



今回の研修の一日目と、三日目に訪れた  
ローラ・ロゲ ダンススクールの生徒が、  
以前に、ペストによって苦しみもたえる  
人々を描写した『死の舞踏』を振付し、こ  
の教会で踊ったことがあるということだっ  
た。

教会の外には子供大のかわいい悪魔の彫



刻が座っている。13世紀に教会の建設が始まった当初、この悪魔には外から見ただけでは、何を造っているのかわからなかった。悪魔は近くの人に何を建築しているのかを尋ねると、「居酒屋だ」と教えられた。お酒が好きな悪魔は、居酒屋が出来れば、常にたくさんのお酒が飲めるのだと思い、建設工事に参加し、一生懸命働いた。完成が近づいた頃になって、ようやくだまされたと気づいた悪魔は狂ったように怒り、教会を壊し始めた。そこでその怒りを鎮めるため、町の人々は隣町に居酒屋を作ることを約束した。こうした逸話から1990年にこの彫刻が作られた。お酒好きの悪魔が教会入り口のすぐ横に座って居酒屋が完成するのを待ちわびている様子である。

## ②市庁舎

市庁舎は1230年に建設が始まって、15世紀にはほぼ今日の姿になった。この市庁舎はドイツ最古のゴシック建築といわれている。4階建てに見えるが実際は2階建てで、大きく見せるためにファサードの壁だけを高くしてある。しかし、壁だけではバルト海からの強風に耐えられないため、壁には風避けの丸い穴が空いている。また、壁の色は雄牛の血にレンガを漬けて出しての色で、それらの手法は、後にこれを真似た建物が建築されるほど特徴あるものだった。

この日は改修工事であったため、その有名な穴の開いた壁は見る事ができなかった。



### 3. 感想

このレビューバックは、私の住んでいる松江市とほぼ同じ人口で、面積は松江市の半分という小さな町である。ここに着いた時はすでに15時をまわっていたためと、天気のせいで、空は少し灰色かかって落ち着いた雰囲気であった。

古く、歴史のあるドイツを思わせる建物が、あちらこちらに点在し、そのどれもが裕福なハンザ商人によって作られた町ということに驚いた。



## ベルリン国立（州立）バレエ学校

Staatliche Ballettschule Berlin und Schule für Artistik

訪問日：2015年9月8日 9:00～17:00

対応者：オラフ・ハーファー（Olaf Hoyer）

マレク・ロジスキー（Marek Rozycki）

学校教育部門の責任者



ハーファー氏

### 1. 施設の概要

この周辺地域は、東ドイツ時代には労働者が住む物価の安い地域だったが、今ではモダンなアパートが建ち、古い工場を利用した劇場がある等、新興住宅地として人気が出ている。広い通りをわたってしばらく行くと、大きな白い建物が見えてくる。

バレエ学校の建物の先に、もうひとつ大きな建物が見える。これは、同じ敷地内にある、アクロバットを学ぶ為の学校である。これらのデザインはドイツのデザイン会社に依頼したもの。生徒の動線を考慮して更衣室の場所を決める等、設備と機能に関しては学校側が細かい注文をした。このデザイン会社はベルリン中央駅をデザインしたところで、案内して下さったロジスキー氏は、「細かい注文を良く聞いてくれて、とても使いやすい建物になりました。」と話していた。



バレエ学校



アクロバット学校

まず、建物全体を案内してもらった。小スタジオが4つ、中スタジオが5つ、大きなスタジオが1つある。どのスタジオも今年の夏休み中に床の張り替えが行われたばかりとのことである。各スタジオにピアノとオーディオセットが備えてある。暖房は天井内部に埋め込まれた形になっており、外からは見えない。天井にはプロジェクターもついている。教師の一人一人が専用のアカウントを持っており、Wi-Fiを通してサーバーから音楽を取り込み、使うことができる。

大スタジオは天井に照明機器が設備され、客席もあり、パフォーマンスができるようになっている。このスタジオは、学校の敷地内に入って建物を見た時、最初に目に入る位置にある。大き

な窓に囲まれて、外の光を取り入れている。

次に見た更衣室には、高さ 2m、幅 42.3cm のロッカーが整然と並ぶ。所々にベンチがおかれている。厚さ 15cm、幅 1m、奥行きも 1m 近い引き出しがついたダンスがある。引き出しの中を見ると、底板に通気の穴が空いている。これは、クラシックチュチュを入れる為の引き出しで、蒸れないように工夫されている。



ロッカールームは数カ所にあるが、バレエ学校と普通の勉強をする学校との間に配置され、生徒が両方の学校を行き来する際に途中で着替えができるようになっている。

普通の学校教育を受ける教室の入り口の壁には時間割が貼ってあるが、最初のクラスは 7 時 50 分から始まる。普通の教育とバレエ教育を両立する為、子供達は通常の学校生活よりも忙しく、厳しい時間割で一日を過ごす。

棟続きの寮に案内してもらった。寮は 4 階建てで、一階には図書室やコンピュータールーム、レクリエーションルーム、保健室、洗濯室等、家から通学している子供達も使える共用の施設がある。

現在 9 歳から 16 歳の生徒 75 人が生活している。生徒達の国籍は 13 カ国に及び、ドイツ人が 60% を占めている。

ここではドイツ語で話すきまりになっている。外国から来た子供達も、はやく言葉を覚えて、ドイツでの生活が円滑に進むようにと言う配慮である。

部屋は 2 人部屋で、各階にキッチンもついている。子供達は各自が各階に入る鍵と自室の鍵を持っている。寮の受付には、寮生の名前が書かれた大きなボードがあり、各自の一日のスケジュールが明確に記されてわかるようになっており、きちんと管理されている。寮では 15 人の教師が 24 時間態勢で生徒の世話をしている。

また、寮の 1 階には衣裳製作室があり、3 人のスタッフが働いている。保管されている衣裳は 16,000 着におよぶ。シューズ部屋には生徒が稽古で使う靴（有料）と発表会用の靴が保管されている。



## 2. ダンス教育の実情

ベルリンバレエ学校に入学する生徒は、4 年間の基礎学校を終え、適正試験を受け、さらに入

学試験に合格しなければならない。5年生でバレエ学校に入学すると、バレエ教育を受けながら、普通の学校教育も受け、9年間の教育の最後の3学年でアビトゥア (abitur 大学の入学資格) を得ることができる。この資格を得るのは大変なことだが、10年生までにダンサーとしての実力が認められれば、職業教育を受けたものとしての資格 (バチェラーbachelor) を得ることができる。一日のスケジュールはかなり密度が濃く、例えば7時50分から音楽の授業を受けた後でバレエの45分クラスを2コマ受け、また学校に戻って教科の授業を受ける、というように進んでいく。普通教育をきちんと受けているので、入学はしたものの様々な事情でバレエを続けられなくなっても、別な進路に進むことも可能である。

ここでの教育は無料だが、11年生から編入する外国人は有料である。上級生になると外国人が多くなるが、年間で授業料だけで10,000から12,000ユーロ、他に寮の費用(1ヶ月580ユーロ)、保険費用等がかかるため、奨学金を得るか、学校の後援会の助けを得るか、あるいは私的なスポンサーを探す必要がある。留学生は資金の問題で1年間滞在しても、また国に戻ってスポンサーを捜す努力を要する場合もある。

外国人が5年生でバレエ学校に入学した場合には、全ての科目をドイツ人の子供と同様に受けなければならない。5年生に1人、6年生に1人、日本人の男の子がいるが、彼らは全ての教育をドイツ人並みに受けることになる。ただし17歳になって11年生から編入した場合には、バレエ教育だけを受ける進路も選べる。この場合、生徒達は寮に住めないで住宅の費用もかかる。

現在生徒数は200人。アクロバットの学校の生徒を加えると350人の生徒が在籍している。校長は両方の学校を治め、双方に別々に芸術監督がいる。バレエ学校の教師は18人、ピアニストが12人、普通教育の教師は20~25人、更に寮の担当が15人という体制である。

バレエ学校の設立は1952年。元の東ベルリン地区にあり、設立当初は、ベラルーシ、ミンスク等のロシアのバレエ学校に倣って作られた。統一後は西ドイツ政府のもとにあるが、教育内容はそのままロシアのバレエ学校に倣い、ドイツの教育法に従って運営されている。

バレエのクラスだけのプレクラスもあり、オーディションを行い毎年20人から25人の子供を受入れている。



### 3. クラス見学

20分刻みで、同時進行している様々なクラスを見学した。

#### ①バレエ学校3年生(11歳)女子 10名

担当は日本人の堀口朝子氏。新学期なので、その日が初日のイタリア人の子供が1人いる。バーレッスンの始めの方を見た。ごくシンプルな組み合わせだが、ポジションとアンドゥオールを大切に、ポール・ドゥ・ブラと顔の向きとのコーディネーションを注意している。

#### ②バレエ学校5年生(13歳)女子 16名

女性教師。服装はジーンズにセーター、スニーカー。新学期で床が新しく、慣れるのに少し時間がかかりますと話していた。

クラスが終わって代表4人にインタビューする機会を持つことができた。4人ともドイツ出身で、1人だけ寮に入っている。2人は6歳から週に2回バレエの稽古をし、2年生からバレエ学校のプレクラスに通っていた。1人は5歳から週1回。もう1人は器械体操をやっていたが、10歳からバレエを始めた。月曜日から土曜日まで毎朝7時50分から午後4時から5時まで2つの学校で勉強をしている。学校とバレエ学校の両立は大変だがうまくいっていると話してくれた。



③最高学年女子（17歳）女子 9名（内日本人2名）

④最高学年男子（17歳）男子 7名

この学年までくると、1年生から入ったドイツ人生徒は半分以下になっている。女子クラスには日本人2名。男子クラスは、ドイツ人2名、ブラジル2名、イタリア2名、ウクライナ1名という構成である。ブラジルの留学生は、2005年から2011年に学校がブラジルで行ったプロジェクトに参加し、2009年に一度ベルリンに来た。1年間滞在したが、経済的問題で一度帰国。スポンサーを探して戻った。卒業後にヨーロッパでダンサーとして踊りたいと思っている。イタリア人留学生は、学校がイタリアで行ったオーディションに参加して招待を受け、2、3カ月の試験期間を経て入学した。学校は、このように外部に出て才能ある生徒を見つける努力もしている。



⑤表現クラス バレエ学校3年生（11歳） 女子15名 男子7名

自分の名前をテーマに、手を使い、足を使い、膝、肘と使う場所を増やし、そこに身体全体を使い、更に方向を加えてだんだん動きを大きくしていく。教師は「正しいとか、正しくないとかではなく、創造



性を大切にしています。自由に動いてもらいながら、空間の使い方、手の使い方の可能性等を助言するようにしています。」と語ってくれた。

⑥モダンクラス バレエ学校6年生（14歳） 女子15名 男子7名



新年度の最初のクラスなので、簡単なステップから慣らしていく。歩きながら頭、肩、胸、腰と力を抜いていく。慣れてきたら、プリエで、ルルヴェでと要素を加えていく。このクラスも、教師に会うのも初めてのレッスンなので、生徒達は戸惑った様子でクラスを受けていたが、踊っていくうちにだんだんリズムをつかんで楽しそうな様子をみせていた。

⑦パ・ド・ドゥ・クラス 最終学年 女性8名 男性5名 16:15～

簡単なアンシェヌマンを与え、全体に必要な注意を与えていく。

このクラスも今日が休み明け最初の授業なので、ポアントに慣れていない女子のために、易しいアンシェヌマンを組んでした。



#### 4. 感想

非常に寛容に、建物内のすべての施設とクラスを見せてくれた。写真撮影も寮の一部を除いては、まったく制限がなかった。

1日見学した印象の中で、我々全員が感じたことは、「下級生のクラスには15名の生徒がいるのに、最終学年は7、8名でしかも途中編入した外国人留学生が多くいる。」ということだった。

昼食時間の後に教師と話す機会を得たが、ここで、途中でやめていく生徒がどれくらいいるのか、という質問が出た。ひとりひとりの事情があるが、入学が10歳と若いので、15歳くらいになると他に興味あるものを見つける子供もいる。あるいは、自分にはクラシックバレエが向かないと考え始める子供もいる。また、実技の進級試験を受けて、不合格になる生徒もいる。こうした生徒たちとは話し合っ、方向変換の相談に乗り、その結果バレエ学校をやめて新しい環境

に移っていくということであった。

小さいうちに外国から留学してきた生徒や、この学校に入る前に他のスタイルでバレエを習ってきた生徒もいる。文化が違い、メソッドが違って戸惑うこともあるが、少しずつ慣れていかなければならないとも話していた。また、年齢が低いうちは男の子のクラスでも女性教師が担任を任されることが多く、レッスンのみでなく、メンタル面でも面倒を見ている。厳しいスケジュールをこなしながら、10歳で親元を離れての生活は、子供達にどんな影響を与えるのだろうかと思った。

ベルリン国立バレエ学校は、ドイツ国内でも唯一のすばらしい設備と教育内容を備えたバレエ学校である。けれども、そうした恵まれた環境の中においても、やはりバレエを続けていくのは難しい。日本の子供たちが直面している、学校との両立の問題、就職等の将来を考えたときの選択、経済的や精神的に家族の支えがあるか、など様々に悩みながら進路を選択する場面に立たされるのはドイツも同じだと感じた。



日本では、別の場所の一般の学校に通いながら、バレエのスタジオで放課後や休日に稽古をしている。そして、進学問題等を抱えながらも、非常に優秀な生徒が育ち成果を上げている。日本で、もう少し楽な環境でバレエの勉強をさせてあげることができないものかと思う。

この学校を卒業したダンサーはかなりの率で就職ができていますが、その実績を守り、評判をあげる為に学校は外国でオーディション等のプロジェクトを展開して優秀な留学生確保にも努めている。これだけの施設を維持するには、経営的にも優秀な生徒を受入れる必要があるのだろう。

最後にロジスキー氏にバレエ協会からの記念品を渡し、暖かいもてなしに感謝を申し上げた。

(諸角佳津子)

## ジプシーレストラン

GIPSY RESTAURANT (アルゼンチンタンゴに興じながらの夕食)

訪問日時：2015年8月9日

訪問場所：ジプシーレストラン Auguststraße 24 10117 Berlin

### 1. 施設の概要

それはまるで、子供の頃に白黒のテレビで見た昭和のダンスホールを想わせる場所だった。外壁は薄汚く汚れ、お世辞にも清潔感のあるレストランとは言い難いものであった。建物の中に入ると、中は薄暗く雑然として、どこか冷たい空気を感じた。天井は高く、蝋燭の明かりは必要に十分ではあったが、幾分教会の中に居るような冷たさを感じた。入り口に近い場所には小さなステージがあり、生演奏するための楽器や音響機器が設置されていた。食事をするためのテーブルは、ダンスをするためのスペースを取り囲むように壁伝いにセットされていた。「食事を楽しみながらダンスに興じる」、そんな大人のレストランであった。



### 2. レストランでの食事

そもそも僕らが「ジプシーレストラン」を訪ねた目的は、その日その場所で行われることになっていたアルゼンチンタンゴのレッスンを受けるためであった。それは何より、今回のパートナーであるドイツ連邦ダンス連盟の会長エラマン氏の強い奨めによるものであった。当初は、別のレストランで食事の後に、ジプシーレストランを訪問して、レッスンを受けるという予定を彼女は計画してくれたのであったが、前日に予約を入れる段階で、レストランで食事をした人だけがレッスンを受講することができるということであったため、その日の夕食の場所を変更して、ジプシーレストランでの食事、そして、レッスンを受講するということに至った。

予定の時間よりも少し早く目的地に着いた僕らは、レストランの従業員にアルゼンチンタンゴのレッスンを受講したい旨を伝えた。すると彼は、まずは食事をオーダーしてほしいとのことで、僕らは兎にも角にも先ず食事をするようになった。僕らのドイツでの研修も後半だと云うのに、

相も変わらずドイツ語で書かれた食事のメニューは読めず、訪独団のメンバーの殆どが通訳の方の丁寧な説明に頼る有り様だった。

### 3. アルゼンチンタンゴ

暫くすると、インストラクターと思しき男性がレストランの中央に現れ、何時からというわけでもなく、ごく自然にアルゼンチンタンゴのレッスンが始まった。それは二人一組で行うアルゼンチンタンゴの基本的なステップを教えるというもので、レストランに来て食事をしている十数組が参加していた。その中には女性同士のペアもいた。

インストラクターは、T シャツにパンツ、裸足にスニーカーという出立で、紳士というよりは寧ろ野性的な青年だ



った。僕はエラマン氏に促され、交代で参加した。ステップは徐々に複雑にはなったが、決して覚えられないものではなかった。それぞれのペアが、教えられたステップを練習している間、音楽はBGMのように流れ続けていた。ところが、どれだけ練習しても初めの一歩が上手く踏めないのである。これには驚いた。ステップを踏むための合図はなく、「用意」と云う掛け声もない。そこには唯、踊っている二人の呼吸があるだけである。つまりアルゼンチンタンゴが踊れるようになるためには、細かいステップの練習よりもパートナーとのコンタクトを取ることに留意して練習することの方が、より重要であると云う事実を痛感した。

切ないメロディーが流れ、ホールでインストラクターの青年とアシスタントの女性によるダンスが静かに始まると、レストランの空気は一変した。10分程で2人の情熱的な踊りが終わり、ホール中に大きな拍手が沸き起こると、それは食事とセットになったアルゼンチンタンゴのレッスンが終了し、大人の時間が始まる合図であった。

### 4. 感想

ドイツのダンスには「ダンス芸術」と「ダンス文化」の2種類があると伺った。正直、直ちにその明確な違いを理解することは難しかった。しかし、ジプシーレストランで行われていたダンスは、紛れもなく「ダンス文化」に属するという確信を持っている。

科学的な根拠はない。それはレッスンの最後に見せられたインストラクターの青年とパートナーの女性との気高く美しく熱い生命力に満ち溢れた踊りが、「ダンスは確かに人間が創り出した文化」であることを証明するに十分だと感じたからである。

(野村一樹)

# カソリック教会附属 聖ヘドウィッグ小学校

## Katholische Grundschule St. Hedwig

訪問日時：2015年9月9日 8:00～

住所：Elbestraße 48 OT Petershagen

対応者：Frau Wuttke-Neumann（小学校長）



### 1. 施設の概要

カソリック教会が開設した私立の小学校で、生徒の50パーセントがカソリックである。1993年に創立され、現在は生徒数170人、教師12人、学童保育指導者12人がいる。学校の授業は8時から14時30分までであるが、朝の6時45分から始業まで、終業から16時45分までは希望者は学童保育に行くことができる。保護者が仕事の前に生徒を送ってくることもあり、学童保育は朝早くから開校している。また、バスで遠くから1時間かけて来る生徒もいる。

1学年1クラスの小さな学校で、去年は27人の1年生募集に対して、74人が応募してきた。



入学に際してペーパーテストはなく、宗教、保護者の所得、男女の割合、姉妹兄弟の在籍状況など様々な要因を踏まえて、全ての生徒と保護者に対しての面接を行ったうえで、校長が入学を決める。

教科担当制で授業は進められ、月謝は月に55ユーロかかる。ランチを希望する場合は、1日2ユーロである。

校舎には、教室、図書室、保健室、職員室、音楽室、体育館、実験室などが設備されている。学年の教室は、担任の先生によってカラフルに飾られていて、生徒たちが描いた絵や旗などが掲示されていた。われわれは、上級生によって、全ての場所に案内されて、係りの生徒がそれぞれの説明してくれた。





また、学校の校庭には、木で作られた遊具や砂場があり、休み時間や放課後に誰でも遊ぶことができる。地面にチェスの盤が描いてあり、大きなチェスのコマをおいて遊ぶことができるコーナーもあった。

## 2. ダンス教育の実情

2006年にブランデンブルク州は、スポーツの時間をダンスへと変更した。速さや点数を競うことで評価をするスポーツの時間をダンスに変更することで、生徒のみならず保護者もダンスを「楽しみ」として捉えることになってきた。以来、1、2、5年生に遊びを通してダンスを教えてきたが、2015年現在の州のプロジェクトでは、1年生と2年生の2学年にダンスを教授している。5、6年生には吹奏楽が教えられ、楽器の提供、指導教師の派遣が行われている。



授業見学の後の、小学校の教師たちとの交流では、「ダンスの授業が増えたことで、生徒が変わってきたことはありますか」と質問を試みた。以下は、その答えである。

- ・男女が話し合うようになってきた。これは、ダンス以外の教科やイベントの時に、いままでではなかったが、話し合っ、一緒に課題をこなしていくようになった。
- ・卒業のイベントにダンスを取り入れるようになった。これは、見に来た保護者も楽しんで、更にダンスに対して興味をもってくれるようになった。
- ・音楽の教師からは、リズムや拍の長さを、身体で理解できるようになったので、音楽の理解も深まってきている、とのことである。

このように、ダンスの授業が開講されたことによって、子供たちにこれまでとは違った大きな変化が生まれたことが、他の教師も認めるところであった。



ダンスの利点を踏まえて、当校でのダンス指導教師であるシモーネ・マイネ氏は、州の講習会でもダンスを教えるようになった。受講した生徒たちは、一緒に踊ることで、共同で動くこと、男女の関係を大切にすることを学び、他の授業や日常生活でもお互いに思いやる気持ちを持つように変化していったのである。

### 3. 交流とクラス見学

#### ①全校生徒との交流

全校生徒が体育館に集まり、校長先生からわれわれ視察団の紹介をしていただく。その後に、生徒への質問、生徒からの質問のコーナーがあった。

我々からの質問では

「ダンスは好きですか」

とっても好きです。楽しいです

「ダンスを見に行きますか」

バレエを劇場でみました。友達の発表会に行きました。ラインダンスを見ました。

「自分で踊るのは楽しいですか」 楽しいです。

「バレエについてはどう思いますが」

男子：やりたくない、ダメ、ブブー（ネガティブな反応）

女子：すてき、踊りたい、good（ポジティブな反応）

低学年の生徒は、自分たちが習っているダンスに対しては好きであると言っているが、高学年、特に男子生徒のダンスへの反応は、どちらかといえばネガティブであった。

生徒からの質問は、「日本に車はありますか」「日本の消防車は何色ですか」など、知らない国への、基本的な質問ばかりであった。



#### ②ダンス授業 3年生 10:30-11:00

30人くらいの3年生（進級したばかり）のクラス。丸い魚と四角い魚をイメージさせて即興で動く。輪になってお互いに見合うことができるスペースを作り、常に笑顔スマイルで動く。自分で考えた「あいさつの動き」を行う。手拍子したりジャンプしたり、好きなように動く。

「シュミット家の家族」の踊りをする。おじいさん、息子さん、奥さん、子供のフリッツの4人が登場。それぞれの動きは、全音符、二分音符、四分音符、八分音符の音で伴奏され、動きも、とってもゆっくり、ゆっくり、早く、素早くが対応している。それぞれの音楽が伴奏されると、子供たちはその家族を演じて、ゆっくり歩いたり、小走りしたりして、変化していく。

輪になって、真ん中にある生徒の動きの真似をする。生徒が次のお手本の生徒を指名して、交代。これを繰り返して、順次動いていく。

#### ③ダンス授業 2年生 11:05-

生徒数 25人。

「額のサークル」という名称で、中心に向かってサークルを作る。「背中のサークル」として、中心に背中を向けてサークルを作る。手をつないで動く、中心に向かって動く、外に回りながら動くなどをピアノの伴奏で行う。

「額のサークル」という名称で、中心に向かってサークルを作る。「背中のサークル」として、中心に背中を向けてサークルを作る。手をつないで動く、中心に向かって動く、外に回りながら動くなどをピアノの伴奏で行う。

積み木をイメージして、積み木をまっすぐにつみあげるように、身体を使う。

丸、四角、三角の積み木をイメージして、

積み木が倒れてく様子で、床に倒れていく。身近なものを使って、身体を動かしていくイメージを与えて、動きへと繋げていく指導方法であった。



#### 4. 感想

教会が開設した私立の学校であるため、校舎は非常にきれいで、生徒たちもよくしつけられている印象であった。残念ながら今回の視察では公立の学校の見学ができなかったため、実際の比較はできないが、学童保育の充実、教師のレベルなど非常に恵まれた環境であると感じた。その中で、ダンスの授業を前向きにとらえた結果、単に身体的な能力の向上以外に、他の教科や生活の場でも、お互いに思いやり、積極的に動くなどの効果が表れていることは、ダンスの持つ身体性と表現性を大いに活用している成功例であった。これは、指導者であるマイネ氏の指導力に大いに負うところが多いとクラス見学をして感じた。生徒たちは動かす原動力を持ち、常に前向きで、表情豊かに導びいていく。知らず知らずのうちに、イメージの中に入り込み、生徒たちは表現する喜びを感じている様子が伺われた。

このようにダンスに特化した指導者を得ることは、公立の小学校にはカリキュラムの縛りもあり簡単なことではないと思うが、ダンスがもたらす生徒への影響を考えて、今後も大いに他の学校も取り入れてほしいと思った。また、現在日本では、中学校でのダンスの男女共修が進んでいるところであるが、リズムダンスのDVDを見せて、振りを覚えて発表するという形で終わっている学校も少なくない。当校のように、ダンス専門教師を利用して、せっかくのダンスの授業を有効に使って、表現する喜びを味わい、ダンスの普及をしていけたらと痛感した。(松村とも子)



# ポツダム・ダンスファクトリー

Tanzfabrik Potsdam

訪問日時：2015年9月10日 14:00～15:00

対応者：スヴェン・ティル Sven Till（芸術監督）

## 1. ポツダム概要



日本人には「ポツダム宣言」で聞き覚えのあるポツダムは、ベルリンの中心街から約 26 kmのドイツ連邦共和国東北部に位置する町である。人口は 16 万人で、ブランデンブルグ州の州都である。

歴史はベルリンより古く、993 年には文書に記述があるらしい。18 世紀半ば、フリードリヒ 2 世の治世の間に建てられたサンサーシー宮殿は

ロココ様式の内装と庭園で有名で、1990 年に「ポツダムトベルリンの宮殿群と公園群」として、ユネスコの世界文化遺産に登録されている。



ポツダム宣言を発された“ツェツィーリエンホーフ宮殿

## 2. 施設の概要

東ドイツ時代にもプロフェッショナルなダンサーを教育する学校は存在したが、趣味のためのダンススクールは無かったそうである。ドイツ統一時、既にフリーで活躍していた振付家、ダンサー、俳優が、このポツダムで新しいダンスの伝統を作って行きたいと終結し、活動を始めたとのことであった。それは、作品の制作と発表だけでなく、素人へのダンス指導とを同時にスター

トさせるといったものであった。3度の移転を経て、1998年に現在の場所へ拠点を移したとのことである。建物は、1998年当初軍隊基地であったこの場所を、ポツダム市からの支援を受けて、改装して造られている。



建物の中には、大小2つのステージと、110平方メートルほどの4つのスタジオが完備されており、カフェテリアも併設されている。大きいステージは12m×12mで、客席は200席ほどある。小さいステージの方は40～50席ほどのものであった。

のダンサーたちには舞台の運営などのノウハウが無かった。そのため彼らはベルリンへ勉強しに行ったり、教師を招いたりするなどして、ベルリンの同じような志の人たちと協力しながら進めていったとのことであった。



(建物内のカフェテリア)

### 3. 活動の実情

1998年当時、軍隊の基地であったこの土地に、芸術家たちが集まり「自分たちの町」と宣言した。ポツダム市議会はそれまでの彼らの活動を評価していたこともあり、彼らの考えに賛同し支援することになった。軍隊は、約1年かけて少しずつ撤退していった。

この土地と建物は、ポツダム市が無償で貸し出ししており、改装費も負担している。しかし、それによる運営についての縛りはなく、運営自体は完全に独立しているということであった。

2003年から2004年には韓国、アメリカ、カナダ、ヨーロッパなどに出向いて色々なグループ

と組んで作品を作るなどした。2005年からはさらに新しい取り組みとして、外国からのアーティストを招き、この地域の素人の人たちと一緒に作品を制作したりしている。日本から参加したダンサーや、DJ もいるらしい。

最近の作品制作活動について次の2つを紹介していただいた。

- ① 『社会における女性の役割』と題した作品。アフリカの女性振付家を招いて、地元の大学生から老人まで15名の女性で、アフリカ、ドイツの女性のそれぞれの立場を表現した作品を制作する。
- ② アメリカの振付家の作品で、近くの湖で100隻のボート、ヨット、それらの乗組員で作品を作って発表した。

以上のように、専門家の作品に一般の人々を加わらせた作品創りにも積極的に取り組んでいる。

当施設で素人へ提供されているクラスの種類は、次の通りである。

- ・ GAGA
- ・ AFRO TANZ
- ・ BMC (Body-Mind Centering)
- ・ CANTIENICA
- ・ STIMME UND BEWEGUNG
- ・ QI GONG
- ・ モダンジャズ
- ・ 10代のためのクラス
- ・ 初心者のためのクラス

レッスン料金は次の通りである。

- ・ 1コース＝ユーロ 35/月
- ・ 2コース＝ユーロ 60/月
- ・ 4ヶ月有効の10回チケット＝ユーロ 119 など。



中央男性：案内してくれた芸術監督のスヴェン・ティル氏

#### 4. 感想

国立のバレエ学校が存在しない日本では、全国的に文化教室は多数あり、素人が趣味で、ダンスのレッスンを受けることは珍しくない。けれど、旧東ドイツであるこの地では、民間人主体で教室やステージを運営することは、まだまだ歴史が浅いのだと知った。

しかし、逆に、25年ほどでこれだけの施設や活動内容が充実していることに驚いた。特に、それまで軍隊基地であったこの土地を、芸術の町にしようという発想は、戦争を知らない私には全く想像がつかないが、彼らにそれ相応の覚悟があったのだろうと思える。その彼らを市議会が協力、支援していることは、芸術、ダンスに求められている役割の大きさを感じた。

市内観光で訪れた、サンスーシー宮殿やその周辺は、ヨーロッパの御伽噺を思わせる美しい町であったが、この町の80%は東西統一後、元の持ち主であった西側の人に返されてから、彼らによって修復したものらしい。このような町の様子からも、芸術が根付くには適した環境であることが伺えた。

まだまだ今回私たちには知らされなかった問題点もあるだろうが、ここには民間の自由な発想と、公立の資金的援助による安定の理想的な形があると、羨ましく思った。

(若佐久美子)



# ノイエーンハーゲン青少年ダンスアンサンブル

Kinder-und Jugendtanzensemble Neuenhagen

訪問日時：2015年9月9日 15:00-16:30

対応者：シモーネ・マイシュ (Simone Meuche) (創立者)

## 1. 施設の概要

青少年ダンスアンサンブル (Kinder-und Jugendtanzensemble Neuenhagen) のスタジオは、ベルリン市の東に位置する、人口 18,000 人の緑豊かなノイエーンハーゲン市の静かな通りに面している。旧東ドイツ時代には映画館であった建物を、マイシュ氏がノイエーンハーゲン市より借り上げた。生徒 1 家庭につき 50 ユーロの寄付や借入により大がかりな改装工事を行い、ダンススタジオとして蘇らせて 2008 年から使用している。ノイエーンハーゲン市から補助金は無く、現在も毎月 400 ユーロの使用料を市に支払っている。

施設は、半地下に小レッススタジオ 1 室、2 階に大レッススタジオ 1 室。更衣室は 1 階に 2 室と 2 階に 3 室あり、時間の隙間がないレッススケジュールを、更衣室の使い方で上手く対応させる仕組みだ。衣裳室が大小 2 室あり、劇場や店で購入したクラシックバレエ、ジャズダンス、フォークダンスの衣裳が 8000 着以上規則正しく並んでいる。また、付属のシューズ、帽子なども整理され保管されていた。その他、理事会用会議室、歌の練習室、シャワー室、道具室、キッチンなども併設している。

教師 (アシスタント含む) 3 名、ピアニスト 5 名。

現在、ノイエーンハーゲン市内外から 580 名の生徒 (内、約 20 名が男子生徒) が通い、170 名が入学するために、キャンセル待ちとなっている。



## 2. 創立者マイシュ氏の略歴およびダンス教育

### ①マイシュ氏の略歴

1973 年に国立バレエ学校 (Music School Berlin) の準備クラスで「子供のバレエ」を習い始める。1989 年に基礎学校 (日本の小学校に対応する) のプロジェクトを立ち上げ、自身による指導を始める。1991 年に Special School for stage dance and dance education にてクラシカルダン



ス、フォークダンス、子供のダンス、モダンダンス、ジャズダンスを学ぶ。

1995年に受講した講習会にて、指導者であった大学教授の勧めにより、ライプチヒ大学(Hochschule für Musik und Theater “Felix Mendelssohn Bartholdy” Leipzig)に編入が特別に認められた。大学では、舞踊方法論(Methodology)、伝統舞踊(Classical dance heritage)、創作法(Choreography)、ジャズダンス、キャラクターダンス、ステップ、ダンスとバレエの歴史、解剖学を学ぶ。1997年に同大学を首席で卒業している。

## ②教育の実情

創設当時は、個人経営のスタジオであるために、経済的には非常に苦しい時期もあったとのことだが、現在は、非営利団体である社団法人となり、税金の優遇措置が受けられるようになった。また、外部からの寄付金や、資金集めを行うことにより、近隣のダンス教室に比べて、月謝を低料金に設定することができている。

この学校では、以下のような多様なダンスを受講することができる。

- ・子供のダンス
- ・クラシカルダンス
- ・モダンダンス
- ・ジャズ
- ・ステップ
- ・ヒップホップ
- ・社交ダンス

レッスンは月曜日から金曜日の平日、午前中は基礎学校での指導。スタジオでは14時～22時の間、毎日10クラス(1クラス=45分)あり、指導の大半は、マイシユ氏によって行われている。土曜日は午前中から午後までイベントのリハーサルを行い、本番間近には日曜日のレッスンもある。

発表会は1年に1度行われ、毎年新しい演目が披露される。会場はベルリン市にある座席数3200人の劇場を使用しているが、生徒数580名を超えるため、すべての席は生徒の家族で売り切れてしまう。時には2回に分けての公演になることもある。

発表会以外でも、テレビ、ミュージカル、ホースショーなどに出演を依頼されることがあり、海外のイベントにも数多く参加している。



### 3. クラス見学

#### ①子供のダンス 4~5歳児 女児17名 15:45~(本来は15:30~の予定)

この日に誕生日の生徒がいたため、レッスン開始の前に誕生会が行われた。皆で誕生日を迎えた友だちに歌を歌い、本人は持参したプレゼントを全員に渡す。ドイツでは誕生日を迎えた子供が、友人にプレゼントを渡す習慣があるとのことだ。

レッスンはシモーネ氏独特の教授法である、リズムに合わせた歌(言葉)を巧みに使い、子供たちの関心を集めレッスンを行っている。そのため、一人で教えていても生徒たちは先生に集中し、よく言うことを聞き、質問などにもしっかりと受け答えしている。

内容は、空間を上手に使うことに重点を置き、姿勢や立ち方、美しく自由に動く、皆で円形に座り手指の使い方、背中の使い方など、子供たちが理解しやすい言葉で進められている。レッスン後、生徒たちは「先生は優しい」「ダンスは楽しい」と嬉しそうに話していた。



#### ②子供のダンス 9~10歳児 女児20名 16:15~

このクラスでは、初めにマイシュ氏から心に問題を抱えている生徒がいるとの説明があった。

レッスンはバーを使ったクラシックバレエの基本、フォークダンスの動きも含まれている。

「青年が踊るコンクール」で優勝したため、ドイツ大会に出場する資格を得、3週間後に控えている「ベルグラートダンスフェスティバル」に参加するため、週末もレッスンしている。このクラスから10名の生徒が参加予定だ。

#### ③モダンダンス 16~17歳 女子14名 17:00~

この年代になると数年前に改革された全日制の学校教育のため、夕方のレッスンに通うことが難しくなってきたとのことだ。クラスの中には色々なレッスンを組み合わせ、週3回のレッスンに打ち込む生徒も、また週1回の生徒もいる。

このクラスの特徴は、伴奏者の手法であった。モダンダンスの動きに合わせて、右手でピアノ、左手でドラム、左足で鈴を鳴らす。この音楽が生徒たちの動きを誘い、生き生きと踊っている。途中からクラシックバレエの練習に変わり、受講生徒は7名になった。バーレッスン、そしてセンターレッスンと続いた。いずれ



のクラスも、今回の我々の訪問のために内容をアレンジしていたので、普段のレッスン内容とは異なっていると説明を受けた。

レッスンでは、基本的にレオタードは黒色で、子供のダンスクラスではタイツ、バレエシューズ、髪型シニヨン、モダンダンスクラスではソックスでレッスンを受けている。

#### ④パフォーマンス

今までに様々なイベントで上演された作品8曲を、私たちのために、衣裳をつけて特別に披露してくれた。

1. クラシックバレエ (2人の踊り)
2. フォークダンス (3人の踊り)
3. モダンダンス (8人の踊り)
4. モダンダンス (12人の踊り)
5. フォークダンス (11人の踊り)
6. ジャズダンス (11人の踊り)
7. クラシックバレエ 「ドン・キホーテ」よりキトリのヴァリエーション
8. ジャズダンス (12人の踊り)

キトリのヴァリエーションを除いては、シモーネ氏の振り付けによる作品である。

## 4. 感想

決して大都会と言えないこの地方都市で、580名の生徒を抱え、1日10クラス、ほぼ1人で教えているシモーネ氏。彼女の指導方法に魅力があることが分かる。言葉をリズムに合わせ、テンポよくレッスンを進めていく。生徒たちはこのテンポに誘われ、協調性を持ちレッスンに集中している。決して上から目線では無く、生徒の年齢に合わせた巧みな口調が特徴的だった。

このスタジオから国立バレエ学校に進学していく生徒もいる中、趣味として長年ダンスを習っている生徒が数多くいる。これは、近隣のスタジオより料金設定が安いことが一つの理由であるが、ダンスのみならず、ドイツ人の文化への関心が高い考え方が大きく関係している。保護者の理解が深く、ダンスを通しての経験を大切にしているようだ。海外公演もたびたび行っているが、テレビ、イベントなどの出演料を利用し、個人にかかる渡航費を援助している。素人の踊りに対し出演料を用意していることに驚きを感じている。また、知名度があるため、発表会にはスポンサーが付き、経済的に恵まれない生徒にも援助がある。

日本のバレエ界では、経済的理由や進学の原因で、志をあきらめてしまう子供たちが多くいるが、プロフェッショナルダンサーにならなくても、心豊かにのびのびとダンスを続けている姿に、考えさせられるものがあった。

(成澤千佳子)

# フライング・ステップ・アカデミー

Flying Steps Academy

訪問日時：9月10日 17:00～19:00

対応者：ヤニー・ハチス Janni Hatsis (マネージャー・アカデミー副校長)

## 1. 施設の概要と組織

ブレイクダンスから始まったフライング・ステップ・アカデミーは、1993年に創立されている。大手清涼飲料水メーカーのレッド・ブル (Red Bull) が運営パートナーとなり、資本金を出資している。『Red Bull Flying Bach』、『Red Bull Flying Illusion』という2つの代表作の成功を機に、2012年より現在の場所、旧西ベルリンの繁華街を少し抜けたところに700㎡のスタジオを作り、活動を続けている。

アカデミーには、約10m×10mのスタジオが3つあり、2つのスタジオの間にある仕切りを外すこともでき、ワークショップなどで、大勢の生徒が受講する場合は、大きなスペースとして活用している。

スタジオの壁には、運営パートナーであるレッド・ブルのロゴが大きく描かれている。公演にもそのネーミングを使っているが、舞台企画や制作は全てフライング・ステップで行われている。

組織は、様々なダンスを受講できるダンススタジオとしてのフライング・ステップ・アカデミーと、プロフェッショナルダンサー35名を抱えて世界的に公演活動を行うグループ、フライング・ステップ (Flying Steps) の2つに分かれている。

フライング・ステップの海外公演は、現在までに45か国で行われている。『Red Bull Flying Bach』は、バッハの音楽とブレイクダンスを融合させた作品で、2012年には東京と大阪でも公演されている。公演のメンバーは、インストラクター (コーチ) やオーディションで選ばれたダンサーたちであるが、現在のところではフライング・ステップ・アカデミーで育ったダンサーはメンバーにはいない。

アカデミーのインストラクターは、資格保持者だけではなく、これまでの経験、信頼性、そして、何よりもチームワークを重んじて採用しているとのことである。



## 2. ダンス教育の実情

アカデミーのレッスンの受講生は、1か月で、のべ1000名。

ダンスのインストラクターは、25名が在籍する。

ここでは、開講されているレッスンは以下のとおりである。

- ・ヒップホップ
- ・ストリートダンス
- ・LAスタイル
- ・ポッピング
- ・ハウスダンス
- ・ダンスホール
- ・ブレイクダンス
- ・子供のダンス
- ・ジャズダンス
- ・Lyrical ダンス
- ・バレエ
- ・タップ
- ・サルサ



受講料は、

10歳以下は、週1回で毎月32ユーロ。体験レッスンは無料。

10歳以上は、ワンレッスン12ユーロ。体験レッスンは7ユーロ。

ダンスクラスは、初級、中級、上級に分かれていて、スケジュール表には級の違いが色分けされている。バレエのクラスは、年齢別に分かれ受講でき、体の基本を作るクラスとされている。フライング・ステップのプロフェッショナルダンサーを目指すには、すべての基礎となるバレエの受講が大切だと、説明があった。

また、通常の開講クラス以外に、「シークレット・ワークショップ」と称するクラスを定期的で開催している。これは、オランダなど海外から講師を招き、普段とは異なるムーブメントを体験し、刺激を受けて上達を目指すワークショップクラスである。このワークショップの受講生は、すでにインストラクターとして教えている人が半数以上で、一般の生徒と共に受講している。

### 3. クラス見学

#### ①ブレイクダンス（初級） 17:20~（本来のクラス時間は16:00~17:30）

10歳~成年までが参加していたが、大半は10代の男の子。Tシャツにトレパン、スニーカー姿で練習に励んでいる。10月に進級試験が控えているため、インストラクターの振り付けを、何度も繰り返し練習し、覚えていた。

クラスの最後にインストラクターから話があった。



「10月の進級テスト。上のクラスに上がれば、今のクラスより厳しくなるが、上手になれば振り付けをするチャンスもある。上を目指すなら、他のことよりダンスのレッスンをすること。しかし、技術だけでなく、チームの一員になれることが大事。」と、精神面の教育も行われていた。皆床に座り、注意深く耳を傾けていた。

### ②子供のバレエ 17:30～（本来のクラス時間は17:30～18:30）

小学校低学年の女子7名、男子1名が参加していた。レオタード、タイツ、バレエシューズを着用している生徒が大半で、髪の毛も結んでいた。中に一人髪が乱れている子供がいたが、レッスン始めにインストラクターが直していた。

ウォームアップでは子供たちを自由に動かし、その動きの中で片足バランスや、顔を床に近づける動きなどを組み入れている。

その後バーレッスンへと繋がっていき、立ち方や腕の位置など丁寧な指導を行っていた。



### ③シークレット・ワークショップ 18:00～（本来時間は17:30～19:00）

この日はブレイクダンスが行われていた。女性15名、男性10名。20代から50代の参加者はほとんどがインストラクターであった。公演活動に参加希望する受講者も多く、特別講師によるハイレベルなレッスンに目を光らせ、スタジオの中は活気に満ち溢れていた。



一番の年長者は、何年もダンスを受講してきている 50 代の女性ときいて、びっくりした。

他にも、未就学児のバレエ、大人のバレエを見学。



#### 4. 感想

このアカデミーは現代的で、アメリカ的な雰囲気がある。いわゆる「いまどき」のダンスを学ぶ場である。子供から成人まで、それぞれ希望するダンスを活気に満ちたスタジオで汗を流しながら楽しんでいる。

日本ではチケット制のスタジオレッスンや、スポーツジムの中にあるスタジオレッスンに似ている印象を受けたが、インストラクターは技術の向上も目的とし、的確に指導をしているように感じた。フライング・ステップの公演活動は、多くのアカデミー指導者、並びに生徒たちに、大きな刺激を与えているようだ。熱意あるインストラクターの助言に耳を傾け、単に汗を流すための運動ではなく、上達することを目的に励んでいる生徒が多くいるように感じた。

ダンスに特化したこのスタジオだが、「いまどき」のダンスを学ぶ中に、バレエの基礎クラスがあり、運営側にも、生徒にもその重要性がいきわたっていた。

(成澤千佳子)

# ダンス財団      ドイツ   トランジッション   センター STIFTUNG TANZ      TRANSITION ZENTRUM DEUTSCHLAND

訪問日時：2015年11月9日

訪問場所：KollwitzstraBe 64 ・10435 Berlin

対応者：サブリーナ・ソドヴァスカ Sabrina Sadwaska

## 1. 施設の概要

大通りに面した建物の正面玄関の扉を開けると中庭があり、数メートル先の右手に見えた扉を開けると、エレベーターはなく、天上高が低く、幅のあまり広くない勾配のきつい階段があった。

5階まで上ると、事務所として使われているその部屋があった。アパートメントの1室を事務所として使っていた。リビングと思われる部屋には事務デスクが一つと会議用の大きなテーブルが一つあるだけの、コンパクトな空間だった。

## 2. 組織の概要

### ① 設立動機

財団の設立者であるソドヴァスカ氏 (Sabrina Sadwaska) は、自身がプロフェッショナルダンサーとして働く中で、一緒に働くダンサーの多くが途中で辞めて行くことが大変に気がかりであった。そのことが後に、バレエとダンス劇場の会長で組織する団体 (ドイツ連邦) の設立 (1997年) と同時に発足した社会問題をテーマとする研究会におけるダンサーのサポートに関する活動へと自らを駆り立てて行くこととなる。

### ② 財団のあゆみ

2006年：ドイツ国内で活動する全てのダンスに関わる個人と団体がメンバーとなって構成される文化財団は、全ドイツにおける唯一のダンス会議である『常設ダンス会議』として創設された。(後に「統括ダンス連盟」と改名) その際、プロのダンサーの人数、所得、ダンサーを辞める理由及びダンサーのサポートに関する実態調査が行われた。州と連邦政府は、その調査結果を踏まえ、ダンサーのサポートを行う団体の設立の推薦を決定した。

2009年：20以上の団体と科学・保険・労働組合・団体に関する仕事の代表者が集まり、「トランジッション」に関するワークショップを開催。その後、財団法人の設立をベルリン



市へ申請した。

2010年1月：ベルリン市より財団法人としての認可を受け、アタシュー氏（Inka Atassi）と共に財団（STIFTUNG TANZ）を設立した。50,000ユーロの資本金を持って設立された財団は、ドイツのダンス計画に則り、事務所の設立に際し43,000ユーロの助成を受けた。

2010年8月：劇場の活動をよく知る人物で心理学を学んでいたハイケ・シャーフ氏（Heike Scharpff）を雇用した。同じ頃、ドイツ文化メディア委員会において、歴史上で初めて「ダンス」がアジェンダに入った。

2011年：文化委員会において、8州より毎年75,000ユーロの財政支援が3年間継続して行われることが決定した。

### ③ 構成メンバー

評議会ディレクター(取締役)：ジョン・ノイマイヤー（John Neumeier）  
振付家、ハンブルク・バレエの芸術監督、米国出身

設立者：サブリーナ・ソドヴァスカ

バレエミストレス、バレエ営業部長、バーゼル市出身  
ダンス教育における資格（Abitour）を取得。プロフェッショナルダンサーとしてのキャリアを30年間持つ。1997年から、バレエケムニッツ（die theater chemnitz）のバレエミストレス及び、副芸術監督に就任、主にコンテンポラリーダンスを担当している。



事務担当者：ハイケ・シャーフ

心理学者、プロジェクトマネージャー

劇場の活動に携わっていた経験を持つシャーフ氏は、劇場では、失業後の話が「タブー」であることをよく知っていた。加えて、最近のドイツ社会では、高齢者の若年層に対する優位性が薄れてきており、一般的に継続して同じ仕事に従事することが難しい状況であること、更に、元来就業に対するドイツ人の性質が極めて保守的であり、転職には好意的ではないこともよく理解していた。



ダンサーに関して言えば、同年代の大学生に比べてアルバイトをしている人が少ないことも承知していた。彼女は、ダンサーに対する啓発活動を行い、生への恐怖心を取り除くべく様々な情報の提供や官僚主義の国家体制において生きるための方法のコーチングを行っている。

### 3. 財団の活動

19世紀のロマンティックバレエが中心だったドイツのバレエ界において、少しずつ、ダンサー自身がムーブメントリサーチに関与するようになり、ドイツ国内で活動するダンサーの生き方が多様化していった。

何より様々な国や民族の文化を享受することで、各々のダンサーが持つ視野が広がった。更に、戦争や難民問題等々により、ダンサー自身の世界観が広がり、「バレエ界しか知らないダンサー」が減ってきたこともドイツ社会において財団が認知されていった大きな要因である。

#### ①カウンセリング

電話、メール、面談によるダンサーへのサポート。

(\*全ドイツで活動するダンサー4000人の内、ドイツ人40%、外国人60%)

ダンサー個人からのメール、電話、面接での相談を個別に受け付け、その上でそれぞれの相談者が持つ能力を分析し、目的を設定するなどのコーチングを行う。コーチングは、原則として、ダンサー自身による主体的な活動を促すためのサポートとして行う。また、シャーフ氏が、必要に応じ直接訪問して助言する場合もある。



#### ②ワークショップ

全ドイツにおいて年に3回行う。トランジションに関する助言、ディスカッション及びダンサーとの交流を図る。カンパニーに雇用されているダンサーは、受講が義務づけられている。

#### ③講義と情報の提供

カンパニー及び大学にて講演活動。

#### ④奨学金の授与、または貸し付けに係る活動

アーティスト活動に従事するダンサーが、将来の不安を取り除き、活動に専念する動機付けとするための経済的支援。

対象者は、経済的な支援の必要性が認められる者に限り、給与明細書、納税証明書、財政計画等の提出が必要である。また、ドイツ国内で5年間活動したものは、無期限にトランジションの対象者となる。しかし、30歳以下のダンサーによる相談が殆どであり40歳以上は殆ど

いない。ドイツでは67歳から年金の受給が始まることに加え、一般的に50歳間近になると安定した生活を送りたいと考えるようになる傾向があるなど、セカンドキャリアのための再教育を受ける必要性の有無に関係していると思われる。

奨学金は、1回1500～2000ユーロ。(複数回の申請が可能)

#### ⑤財団の活動の周知

全ドイツにおいて、さまざまな普及活動を行う。

パンフレットを作成し、ダンスカンパニーへ送付する。ホームページを作成し、IT環境による広報活動を行う。新聞(広報誌)を作成し1700か所へ送付する。

### 4. 次期の活動

現在この財団を機能させるために必要な財務の実情は、財団の活動に関する関心、市場における財団の会費による資産や特別な配当についての関心の低さが原因によってカバーされていない。つまり、財団は未だに追加の補助金に依存している状態である。以下のテーマに関する事業については、次期の課題とされ、今後それぞれの責任者や研究機関において議論される予定である。

#### ①研究のためのサポート

殆どのダンサーは、既に「学生貸し付け」や「補助金」等の学生サポートの年齢制限の平均を超えてしまっているため、文部省が行う年齢制限に関する議論の先導をサポートする。

#### ②連邦雇用庁

雇用市場における、機会均等を管轄する省と共に働く。

#### ③ダンス医学

労働災害に関する認識を深めると共にダンサーのための疾患を研究するため、プロフェッショナルダンサーによって公表されている相談や健康の早急な調査を行う。

### 5. 感想

何れの国においても、ダンサーとして生きることは決して容易ではない。

それは「踊っているとき」も「踊ることを止めたあとも」である。何れの国であっても、当然のことだが、誰もがプロフェッショナルダンサーとしての仕事に就けるわけではない。幼少期からそのための教育を受け且つ天賦の才を与えられたものだけがダンサーと云う職業に就くことが出来る。けれども、それも恒久的なものではない。従って、いつかは全てのダンサーが踊ることを止める。ダンサーとして踊ることだけに生きてきた人間が、ダンサーと云う職業を辞めたのち、如何にして生きて行くべきか。このことについて、ソドヴァスカ氏は「プロフェッショナルダンサーとして生きてきたものは、他の仕事に就くことが難しい。それは常に己と向き合い表現することを課せられ、長い間、仕事とプライベートが区別しにくい状態で生活してきたことが影響し

ている」と指摘する。彼女もまた、ある時期にプロフェッショナルダンサーとして踊ることを止めた一人の舞踊家である。

彼女は、今自分と同じようにダンスを愛し、ミュージズに愛された若者たちが、将来のドイツ社会を豊かにする「ダンサー」として安心して働けるための環境作りに尽力している。それは政治への参画であり、ネットワークの構築であり、実質的なダンサーへの支援であった。

「ダンサーは踊ることが全て。でも皆、いつかは踊ることを止めて生きていかなければならぬからね」そう語るソドヴァスカ氏言葉には、全てのダンサーへの敬意とダンスへの深い愛情が感じられた。

ダンス財団は、日本のバレエ社会の将来を考えたとき、僕ら公益社団法人、日本バレエ協会の活動にとって、たくさんのヒントを与えてくれた。実に有意義な訪問であった。

(野村一樹)



## コンテンポラリーダンス公演をみて

公演場所：ラボグラス (Laborgras)

公演日時：2015年9月11日 20:40~21:30

### 1. 公演概要

題名：『ambulo ergo sum - ich laufe also bin ich』 (われ歩く、故にわれあり) の意

振付：レネタ・グラジアデイ (Reneta Graziadei)、アーサー・スタルディ (Arthur Stäldi)

ダンサー： Arianna Rodeghiero、Johanna Kasperowitsch、MariaGiulia Serantoni  
Reneta Graziadei

作曲： Phoebe Killdeer & Ole Wulfers

ミュージシャン： Charly Schoppner Julien Decoret Ole Wulfers Phoebe Killdeer

衣装： Chantal Margiotta Claudia Janitschek

照明デザイン： Lutz Deppe

### 2. 公演内容

題名の『ambulo ergo sum - ich laufe also bin ich』は、「われ歩く、故にわれあり」という意味で、「ambulo ergo sum」がラテン語、「ich laufe also bin ich」はドイツ語である。フランス生まれの哲学者デカルトの言葉で、「コギト・エルゴ・スム (cogito ergo sum)」があり、意味は「われ思う、故にわれあり (フランス語で je pense, donc je suis)」であるが、それにかけて付けられた題名と思われる。

上演されたのは、ベルリン市内にある、ラボグラスという小さなパフォーマンスセンターであ



った。夜の8時過ぎに到着し、古い門をくぐって進むと古い建物を再利用した小さなスペースが闇の中から現れた。ロビーも壁にモニターなどがあり、ラボのよう。2002年に創設されて以来、コンテンポラリーダンスの研究、創作、上演の場所として使われている。ここでは、プロフェッショナルレベルのダンスクラスや海外からのダンサーのワークショップも行われて交流が図られている。ワークショップ後の発表、公開リハーサル、作品上演へとつながり、上演者と観客の交流に力をいれている。そうした交流が、芸術家の向上と将来の発展に大きく寄与していると考えている。

今回の振付は、オーストリア人のグラジアデイと、スイス人のスタルディである。ダンサーは4人 (女性3名、男性1名) で、男性ダンサーがスタルディであった。下手奥に楽器が設置されて、4人のミュージシャンによるライブ演奏であ

った。



20:40 にスタート。下手奥で、黒服のミュージシャン4人によるライブ音楽で始まる。ドラムとエレキギターのビートのきいた曲。舞台のホリゾンには上から白の幕がかかり、中央から出入りが可能。赤シャツの男性と青シャツの女性が、モデルウォークで登場しては戻っていく。サークル

に歩く。止まる、動く。前に後ろに。止まって、動く。4人になり、シンクロしたり、ソロで踊ったり。4人のスピードを違えて、緩急をつけて動き、触れそうで触れない。

音が、木琴などのパーカッションの音に変化すると、今度は1人が動き、3人が見ている。次第に他の3人も加わる。互いの踊りを手探りしているような感じで、触れることなく、適度な距離を取っている。女性のボーカルが入ると、2つのグループに分かれて、対角になりながら動く。床にはりつき、上半身を放り投げるように勢いを使って、次の場所に移動する。照明は全体に暗めだが、ときどき明るくなる。その後、無音になり、赤シャツの男性がパントマイムのような動きから、徐々に大きな動きをする。

後半では、ダンサーがミュージシャンと一緒に歩く。ダンサーは笑いながら拍手している。いままでの無表情な雰囲気から一転して、明るい感じ。観客は、何ももともとめているのかわからず、とまどいながらも拍手をしていく。

終盤には、ギコギコ、ギョングン、ボワンとした音のミックスと共に、少しずつ前へ移動してくる。そして、シルエットになり、ユニゾン。後ろへ下がっていく。四方に散らばり、周りながら動く。ダンサーの疲れが見えて、動きのクオリティが低下しているので、空気感が伝わらない。一人ずつ去っていく。赤シャツの男性が去り、音楽だけが続く。

### 3. 感想

ライブの音楽と共に、ダンサーが無表情に動きを繰り返す。突然止まる。「われ歩く、故にわれ在り」という題名が示すように、その連続の中に、個人が存在しているということを表現していると思うが、ダンサーがお互いを無視したような無機質な雰囲気が作られていく中で、途中で、ダンサーとミュージシャンが和んでほほえみながら、手拍子をして、顔を見合わせたり、笑いあったりする場面では、今まで作られてきた緊張した空気が壊されてしまい、見ている側として、何を感じたらいいのかという戸惑いが生まれてしまった。

ライブ演奏で、音がやってくるという表現がふさわしいくらいの迫力を感じているにもかかわらず、ダンスから伝わるものが少なく不安定で、中途半端な気分でラストを迎えた。ダンスのエネルギーとこだわりを見せてほしかったと思う。

今後も、レッスン、ワークショップ、公演とつながる一連の流れを継続できる実験的な空間としてのラボの活動は、若い振付家やダンサーを後押しして展開していくようである。

(松村とも子)

## **添付資料**

- 1. 第一回派遣事業報告会議事録**
- 2. 第一回派遣事業参加者公募要項**

## 2015 日独青少年指導者交流事業 ドイツ研修報告会議事録

2015 年 10 月 29 日 (木) 14:00~15:45 於：公益社団法人日本バレエ協会事務所

出席 吉田まり 野村一樹 成澤智香子 諸角佳津美 松村とも子 若佐久美子

樫野隆幸 (以上、訪独団)

岡本佳津子 小林紀子 高木俊徳 漆原宏樹 金田和洋 篠原聖一

早川恵美子 (以上、日本バレエ協会代表理事・常務理事)

小林秀穂 (事務局主任)

司会進行：高木俊徳 書記：早川恵美子

出席者紹介：

司会進行の高木俊徳より出席常務理事の紹介があり、今回訪独メンバーの団長としての吉田まりからメンバーの紹介があった。

書記として早川恵美子、事務局主任小林秀穂の紹介が高木俊徳よりあった。

岡本 (日本バレエ協会会長) 挨拶：

青少年国際交流推進事業としてバレエ協会がドイツとの交流を行なうことを文科省から委託され、公募により派遣のメンバーが選ばれ、本日報告会が迎えられたことを皆様に感謝いたします。本日は宜しくお願い致します。

高木：これからは吉田まり氏に進行をお任せいたしますので宜しくお願い致します。

吉田：概要は書面にてお渡ししてありますが詳細は派遣メンバーがそれぞれに解説いたします。まず初めにドイツでの行程を樫野さんからお願い致します。

樫野が 8 月 31 日トルコ航空にて成田から出発してハンブルグ、キール(ルーベック)、ベルリンと日程ごとに 9 月 13 日 (日)、日本に帰国までの行程を写真付きで説明。

諸角：9 月 1 日にローラー・ロゲ ダンススクール支部に訪問しました。この学校は政府から認められた教師の養成学校でこの日は支部を見学させていただきました。この日はダンス教師の教育というよりも子供のダンス (キンダーダンスといわれている) を見学しましたが所謂バレエではなく表現舞踊音楽に合わせていろいろの表現を勉強してゆく文化センター的なところで、その中からバレエに進んだりモンダに進んだりというところだそうです。校長から学校の歴史、指導法、独自のメソッドの説明を受けました。

現校長のお母様ローラ・ロゲさんはルドルフ・フォン・ラヴァンのアシスタントを務めていた人でその方がこの学校を開いたそうです。今の校長はダンサーとして活躍した人ではないがラヴァンのメソッドを継承しているそうです。

野村：9 月 1 日夜、ドイツ連邦政府ダンス連盟の副会長であるディーダ・クノーデルさんが率いるフォークダンスグループ「渡り鳥」を訪問しました。

このグループはアマチュアの踊り手たち（指導者はプロフェッショナル）のグループで 1971 年に社会性があり、人心を掌握することにたけていたといわれるハースト・ベック氏がフォークダンスはステップに忠実の踏むことが重要であるという考えでこの団体は設立されたそうで、現在の総会員数は 80 名ほどで正当なフォークダンスを学ぶことを通して踊る楽しさを表現するダンスグループとしてドイツ国内、国外で活動するグループとコンタクトを取って活動しているとのこと。この団体は 4 つのグループにわかれており 1、児童舞踊グループ 2、青少年グループ、3、総合グループ、4、舞台グループのカテゴリーとなり活動内容は児童舞踊グループは 4 歳から 11 歳までで体の動きの法則を知ること、現在 12 歳～14 歳までのグループは参加者がいないとのこと。青少年グループは 15 歳以上で様々な国の民族舞踊を踊るグループでパフォーマンスをする際は民族衣裳を付け振付された踊りを披露するそうです。総合グループは年齢は問わないということで、何よりも他人とともに民族音楽で踊る楽しさを知ることが目的とした唯一のグループで、様々な国のサークルダンス、ラインダンス、ペアダンス等を異なるテンポで踊るグループでこのグループの入会は随時可能でそうです。舞台グループは男女の舞踊家たちが集中的に訓練しさまざまな国の民族舞踊、ドイツの民族舞踊を披露するという。パフォーマンスは年のうち 8 回～10 回程度で劇場、公演、広場での祭りなどで、また海外公演も行うとのこと。

現在の指導者ディーダ・クノーデル氏は 1984 年から創設者ベック氏の引退後これを引き継ぎ、フォークダンスのステップの質を守りパフォーマンスの際には踊っている人の顔を見るなどフォークダンスの規律を守り、加えて踊ることに対する誠実さが重要だと考えているようです。受講者に対しては常に厳格かつ寛容な態度で臨み真面目に受講させなければならないとし、その上で楽しさを感じさせることができることがダンス指導者としての役割であると考えているのがディーダさんの方針だそうです。

この後舞台グループの見学をさせていただきました。体育館のような場所でレパートリーの練習をしており、ステップの確認、フォーメーションの確認等を稽古していました。最後には参加をしないかとの声がかかり、日本側も参加して終了しました。

若佐：9月2日 ジョン・ノイマイヤーのハンブルグバレエ学校訪問の解説をいたします。ここでは 2 年生（12 歳位）の男女のクラス、4 年生（13、14 歳）の女子のクラス、7、8 年生（プロを目指している人たちの劇場クラス）のクラシック、コンテンポラリーのクラス、リハーサル等を見学することができました。学校のシステムの違い等の説明を受けたり現状も説明していただきました。

この学校ではハンブルグバレエ団、ドイツ連邦青年バレエ団がノイマイヤーの下に運営されているので子供たちは身近に良いものをみて成長してゆくことができるとのこと。

成澤：9月3日 本来は小学校の見学の予定でしたが、都合でキャンセルになりハンブルグの中心街を見学、クルージング、サーカスの観賞など一日のんびり過ごすことができました。

諸角：9月4日 初日に訪問したローラー・ロゲ・ダンススクールの本部を訪問。本部も支部も文化センター的なアマチュア対象のものだけではなく、ここでも幼児のダンス、子供のダンス、モダンダンス、クラシックバレエ、即興、ダンシング体操（体操を音楽に合わせる）、ジャズダンス、ヒップホップ、ダンスパフォーマンスの制作などを教えるクラスが組まれていました。そのほかにアマチュアを教える教師を養成するクラスというものもあるそうです。

またこの学校は政府に認められているのでハンブルグに住所がある人は政府から優遇措置があるが外からの人にとっては高額のコストになるそうです。

インプロのクラスやフォークダンスのクラスには見学だけでなく派遣メンバーも参加いたしました。

野村：9月5日・6日は6家庭のホームステイをしましたが5日にディーダ氏宅で歓迎のホームパーティーを開いてくださいました。ホストファミリーと一緒にバーベキューパーティーを楽しみ、それぞれのホームステイ先に向かいました。

若佐：9月6日ドイツの一番北にある州キール（Kiel）に向かい、第10回 Laboer 民族衣裳祭を見学しました。このお祭りは伝統歴史的な衣裳のお祭りで昔ながらの衣裳でパレードをしてフォークダンスを踊るのですがあくまでも衣裳がメインです。

その後リュベックに移動して世界文化遺産の観光をさせて頂きました。

諸角：9月8日 ベルリンに移動してベルリン国立バレエ学校を見学しました。

この学校には小スタジオが4つ、中スタジオが5つ、スタジオパフォーマンスができるような大きなスタジオが1つありどのスタジオもピアノはもちろんハイテクの音響設備が整えられていました。学校用の衣裳制作室（16000着所蔵）、シューズ部屋、具合が悪くなったときに休む部屋などが設置されています。また隣には寮が出来ており13か国の9歳から16歳までの生徒が生活しているそうです。15名の教師が24時間体制でケアをしているそうです。その後少しずついろいろなクラスを見学させてもらいました。最高学年になるとだいぶ人数が少なくなっていますが、やはりここでも学校との両立が大変だったり、ダンスに向いていないからとかいろいろな理由でドイツ人の学生が少なく、留学生が多いとのことでした。

野村：ベルリンバレエ学校見学の後ジプシーレストランと称するところで夕食とりました。このレストランはホール（ダンスホール）付のレストランでアルゼンチン・タンゴだけでなく他のジャンルの踊りや催し物ができるスペースを備えています。この日はアルゼンチン・タンゴの指導者がレクチャーをしてくれ、一緒に踊り食事をして、フリーダンスとなって派遣メンバーも悪戦苦闘しながら

アルゼンチン・タンゴを体験してきました。

松村：9月9日 カソリック教会附属小学校の見学。この小学校は教会が持っている私立の小学校で1993年に創立、教師が12名、学童保育の教師が12名います。学校は8時～14時までなのですが朝6時45分～児童を預かり、学校の授業が終わってから16時45分まで預かってくれるということで学童保育が併設されていました。一学年（本年度の入学者は27名）が1クラスで面接により入学者を決めているそうです。この学校は教科による先生の担当制なので日本のように一人の先生が全教科を教えることはありません。ドイツの小学校はほとんど授業料が無料なのですがこの学校は一か月55ユーロ（約¥8000）程かかるそうです。

この学校のダンスのクラスを見学させてもらいました。本来体育の中で遊びながらダンスを教えるというものであったそうですが2006年に体育のスポーツの時間をダンスに変えてみたらいろいろな利点が現れたので、それを続行しているとのこと。

3年生のクラスを見学させてもらいましたが教師はこの学校の専属の教師ではなくプライベートでダンスの教室を持っているシモーヌさんという外部の方が指導していました。

成澤：同日の午後は前述の付属小学校で教師をしているシモーヌさんが開いているダンス・スタジオ（青少年ダンスアンサンブル）を見学しました。この方の指導方法が有名で、人気があるようです。音楽に合わせて言葉を巧みに使って子供たちの気持ちを集めていました。1クラス20名ほどのクラスですが小さな子供が集中してクラスを受けているのが印象的でした。青少年ダンスアンサンブルはシモーヌさんがほとんど一人で教えているが現在生徒が580人、キャンセル待ちが170人ということです。施設は大小のスタジオがひとつずつ、更衣室が五つあり過密なスケジュールをこなすのに更衣室の使い方を上手にしているとのことでした。

社団法人になっていますがあくまでも個人のスタジオなので劇場とかお店から買った中古の衣裳が8000着保有、そのほか靴、帽子なども整理して保管されていました。施設は旧東ドイツの映画館をリメイクして使用しているが、その改修費は個人の借り受け以外に1家庭より50ユーロ寄付してもらってまかなったということで驚いています。社団法人になり税金の優遇を受けられるようになり寄付金も増えたりして今では海外公演も行い、テレビ出演やミュージカル出演等もおこなっているとのことでした。

ただ国立のバレエ学校とは違うのでレヴェル的には比較することはできませんが、今回の訪問が新学期始まったばかりなので準備が大変だったと思うのですが8つのパフォーマンス（いろいろなジャンルのダンス）を見せて頂きました。

吉田：時間が無くなってきたので9月10日のポスダム・ダンス・ファクトリーとフライング・ステップ・アカデミーは省略させていただき、野村さんより Transition Zentrum Deutschland の説明をお願いします。

野村：9月11日 (STIFTUNG TANZ) Transition Zentrum Deutschland とは『ダンサーが踊ることを辞めたあとの支援』ということを活動の目的としている財団です。組織はまず頂点に理事会ありこれは政治活動や資金調達、ロビー活動等を行う機関、その下に評議委員会と講演会、事務局がある。評議委員会はこの組織の管理、監督、ロビー活動。そして講演会はロビー活動をする。事務局にこの会の会長（現在はジョン・ノイマイヤー氏）がいて運営、経営、会計、寄付金の管理、人脈の構築、資金の調達、契約の管理等を担っているそうです。

その下に事務所（プロジェクトマネージャー）＝実動部隊となるがこの事務所の具体的な活動はドイツ社会に対する活動（概念の創造、組織の形成、ネットワークの構築等）があり、ダンサーに対しての活動はカウンセリング、コーチング、科学的データの取得と評価、電話・メール相談そして講義やワークショップの実施などを行っているそうです。

この財団の創設者サブリーナ・スロヴァスカ女史がこれらを説明してくださいましたが①政治への参画、②ネットワークの構築 ③ダンサーが踊ることを辞めたあとの支援、この3つを考えている組織といえます。

吉田：この派遣に参加しての感想を述べさせていただきます。

非常に過密スケジュールでありましたのですべてを消化出来ているとは言えないかもしれません。ダンス連盟やドイツのシステムが非常に複雑なのでわからない部分が多々あり、申し訳ないと思いますが次回には資料を集めて事前の下調べをしてゆくべきだと思います。ドイツ側の方は良く対応してくださり特に通訳のハイケ・パチクさんがほんとに良く面倒見た下さり感謝しています。

高木：時間となっておりますが、常務理事会からも質問があるのでしばらく延長させていただきます。

金田：最後の組織の話は今後バレエ協会としても反映してゆくべき事柄なので、本日は無理ですが詳細を知りたいと思います。

成澤：派遣メンバーではこの組織をダンサーのハローワークと呼んでいましたが東西分裂時代からこのような組織は存在していたが統合されてより大きな組織となっているそうです。

高木：実際、この組織の活動は生きているのですか？

野村：ハイ、実際きちんと運営されています。今回時間の関係で省いた部分がたくさんありますのでまた機会があれば、説明させていただきます。

設立5年なのでまだ知らない人もいるようですが5周年記念の時にはこの財団のための財源を作ろうということで各カンパニーが公演を行い、その収益を寄付したそうです。

高木：みなさんのお話は大変有意義なものでしたが、今度日本が受け入れる側になった時、どのようにしたらよいか不安を感じますが、どのようなことをしたらよいか皆さんのお考えはいかがですか？

吉田：ドイツのダンス連盟というのはすべてのジャンルのダンスを組織しているので日本がバレエだけの対応となると難しいのではないかと思います。

金田：日本側としてはバレエ協会の出来る範囲の中でバレエ界の現状を見せればよいのではないかと。

小林秀：11月初旬に日本の文科省とドイツ側の会談があるそうですので、それまでに日本側の交流テーマ（日本側はこのような視点でドイツ側の受入れプログラムを構築する、という点）をはっきりさせておけば特に今回のドイツ側プログラムと同じようにする必要はないと思います。

成澤：ドイツ側としてはダンス芸術とダンス文化を分けて考えていて、ダンス連盟はダンス文化に属するところでダンス芸術がプロフェッショナルなものに対してダンス文化は一般的なものに対する組織だという説明をはじめに受けました。

小林紀：文科省からバレエ協会に来たときはバレエの指導者をドイツに派遣するというので、たまたま受け入れがドイツのダンス連盟であったので、こちらが同じことをする必要はないです。他のジャンルのものを日本の文化として紹介することは可能なのでバレエ協会の視点でプランを立ててよいと思います。

諸角：文化という中に一般の人の中に踊りというものがどこまで入っているかということを見たいような感じがするのですが、日本で特徴的なことはカルチャー・センターの繁栄ではないかと思います。一般の人が踊りたいときに踊れる場としてのカルチャー・センターは日本の文化といえるのではないかと思います。

高木：日本での現状をありのままに見せることは吝かではないが、あたたかな歓迎を受けたことがとても強く感じられるので、日本側としてもそれ相当の受け入れを考えたいと思います。そろそろ時間ですので小林副会長より閉会の辞をお長居いたします。

小林紀：皆さんが過密なスケジュールで訪独されて国立のスクールから底辺の教育まで抱えているドイツを訪問されて直に見たり聞いたりしたことを国の方に報告していただきたいと思います。Transition Zentrum Deutschlandの組織が一番国に伝えたいことかもしれませんが、日本の現状はその土台すら出来ていない悲惨な状態なのでそのこともどうぞ国の方に伝えて頂ければ交流事業の成果となるのではないのでしょうか。今後3年間この事業は続きますので皆様の意見を聞きながら進めてゆきたいと思います。本日はご苦労様でした。

# 平成 27 年度「青少年国際交流推進事業」・日独青少年指導者セミナー B3(芸術分野)ーバレエ(ダンス)分野における交流ー 派遣メンバー募集要項

＜文部科学省委託事業＞

## 日独青少年指導者セミナーについて

日独青少年指導者セミナー事業は、日本ドイツ両国の政府主催（日本側実施主体は文部科学省）で実施され、相互交流や研究協議、意見交換等を通して両国間の理解と親善を深め、信頼関係を構築することを目的として長年に亘って実施されている事業であり、両国の青少年指導者及び青年リーダーのそれぞれ派遣、受け入れを行って意見交換や両国の青少年育成活動、施設等の現地調査を行うなど研修を伴った相互交流を実施します。

今年度の B3（芸術分野）での交流は「バレエ（ダンス）分野での交流」に設定され、日本側実施団体は公益社団法人日本バレエ協会、ドイツ側実施団体はドイツ連邦ダンス連盟 (Deutscher Bundesverband Tanz : D B T) に決定され、交流事業を実施する事となりました。

## 派遣事業募集要項

### ● 趣旨

上記の事業趣旨に従ってドイツを訪問し、同地のバレエ（ダンス）関係者と意見交換や実地見学を通じて、両国の理解と友好を深め、国際的視野に立った有為な青年の育成方法の研究と両国間における青年指導者交流の発展を図ります。

### ● 研修テーマ

「日本とドイツのダンス（バレエ）教育のシステム・制度の違い」

### ● 日程

事前研修会：平成 27 年 8 月 30 日（日）同日東京宿泊

派遣事業：平成 27 年 8 月 31 日（月）成田発～ハンブルグ着

9 月 12 日（土）ベルリン発帰国

13 泊 14 日（事前セミナー 1 日別）

※事前研修セミナーの会場は、東京都品川区五反田日本バレエ協会事務所（予定）です。

### ● 募集人員 6 名

### ● 応募資格

以下の条件を満たす者で、ドイツでの研修の成果を日本の社会や職場・生活に活かすことができる者。

(1) 日本の国籍を有し、平成 27 年 4 月 1 日現在、40 歳以上 60 歳位までの方

(2) 心身が健康で協調性に富み、研修計画に従って規律ある団体行動ができる方

- (3) 派遣事業・事前研修セミナーの全期間参加が可能な方
- (4) バレエ（ダンス）に関する職、特に青少年への教授、指導に就いている方
- (5) 報告義務（研修レポート等提出）を期日までに確実に果たせる方
- (6) 平成27年9月13日以降まで有効なパスポートを取得済の方

※ 語学能力は特に問いません。

● 諸経費（当協会にお支払いいただく経費） 参加金：120,000円前後

- (1) 文部科学省が定めた「青少年交流推進事業（国際交流事業）実施要領」により、航空運賃の1/2以上を受益者（参加者）が負担する原則。（上記金額は運賃相場により変動します）
- (2) ドイツ国内でのプログラムにおける宿泊費、全食事、移動交通費はドイツ連邦政府が負担します。
- (3) 事前研修会セミナーにかかる費用は無料です。（4）成田空港までの往復交通費、ドイツ側プログラム中に提供される食事以外の飲食費、渡航中の海外旅行保険加入（必須）は、別途自己負担となります。

● 応募方法

平成27年7月31日（金）（必着）までに当協会事務局へ提出書類を郵送又は持参してください。

● 参加決定について

提出書類を基に厳正な選考を行い、当協会理事会にて決定の上、文書で通知いたします。

● 提出書類について

(1) 参加申込書

- ・ 申込書は、本要項付属のもの、又は当協会ウェブサイトよりダウンロードしたものを使用。

申込書記入上の注意

- ・ 「現住所」資料の郵送先としますので、常時本人に連絡可能な場所を記入してください。
- ・ 「訪独中連絡先」訪独中の日本での連絡先（ご家族住所など適宜）

(2) 参加志望動機書 <題名は各自自由に付し、以下の4点について記述してください>

- ・ ドイツ研修における関心事項
- ・ 自身の仕事や活動内容について、ドイツに伝えられることは何か。
- ・ ドイツでの研修の中で何を学びたいか
- ・ ドイツでの研修で学んだことを、帰国後どのように活かすか

(800字以上1,200字以内、A4横書きを使用、題名及び氏名を記入、手書き不可。パソコンを使用してください。)

(3) パスポートの写しを必ず添付して下さい。

**申込書送付先及び問い合わせ先**

公益社団法人日本バレエ協会事務局

〒141-0031 東京都品川区西五反田7-17-5 宮下ビル3階

TEL 03-5437-0371 / (平日の午前10時～午後5時) FAX 03-5437-8464 E-mail kobayashi@j-b-a.or.jp

## 参加申込書

平成 27 年    月    日

公益社団法人日本バレエ協会 殿

私は日独青少年指導者セミナーB3（芸術分野）派遣メンバーに応募致します。

フリガナ 氏 名		性 別	男 ・ 女
		年 齢	才
ローマ字表記			
現 住 所	〒		
電話番号		ファックス番号	
携帯電話		メールアドレス	
勤務先名称			
役 職 名	<勤務先での役職・身分等>		
勤務先住所	〒		
勤務先電話番号		勤務先 FAX	
訪独中連絡先 ・ 現住所 ・ 勤務先 ○印して下さい	<上記いずれでもない場合はご記入下さい> 連絡先名称、または氏名： 〒		
連絡先電話番号		連絡先 FAX	
学歴・職歴 賞 罰 等	<書式自由>		
海外在住歴等	有 ・ 無                      有の場合の国名：		

※ 参加の選考基準として健康状態を考慮させて頂く場合がございますので予めご了承下さい。